－文 芸－

草の丘

第 11 号

2016 年 12 月 印旛文学の会

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第十一号（二〇一六年十二月）

目次　草の丘 第十一号

《短編》
明暦の大火　畑中康郎 …… 一
《短歌・詩》
霜月から師走まで　いんば華子 …… 一六
冬の日の友へ　中川とら …… 一七
《連載小説》
そよのバアバの空中サロン(その二)　中川とら …… 一九
ラン博士の館(第二話)　唐瀬 光 …… 二五
《評論》
筒香嘉智と畑岡奈紗　畑中康郎 …… 五三
《短編》
モミジのごとく　香取 淳 …… 五八
《カット》
高橋より

明暦の大火

畑中康郎

かつて江戸で十万人もの人命が失われた大火があった。

明暦三年（一六五七）の一月十八日と十九日の両日に発生した「明暦の大火」がそれである。火元は別だったが、十八日の方が規模は大きかった。火は折からの強い北西風にあおられ湯島、駿河台、神田、日本橋とまたたく間に延焼。隅田川の岸辺に至ってやっと火の勢いが止まった。

この火災で外堀以内のほとんど全域、天守閣を含む江戸城や多数の大名屋敷そして市街地の大半が灰燼に帰した。徳川御三家の屋敷も江戸城外に転出。それに倣うように、大名屋敷、武家屋敷、寺社までもが城外に移転した。急激な人口膨張によって、狭く住みにくくなった江戸の都市改造が、期せずして完成する形となった。

そして、大火はこの物語に登場する日本橋小伝馬町の牢屋敷に収監されていた人々の運命をも大きく変えた。

激しく燃えさかる火が日本橋小伝馬町に近づいたのは、すでに外が薄暗くなり始めた時分のことであった。そのとき小伝馬町の牢屋敷には六十人の囚人が留置されていた。火はあと半刻もすれば、牢屋敷を嘗め尽くす。無論、囚人は自由を奪われているから、放置すれば間違いなく全員が焼け死ぬ。

このときの囚獄（牢屋敷の長官）が石出帯刀であった。身分はさほど高くない。囚獄は江戸町奉行の配下だったが、その役目は罪人を預かるだけで彼らを解き放つ権限はない。権限は奉行が有しており、石出には大火事という非常時にあっても牢を開けることができなかった。

彼は苦悩した。もとより奉行に許可を得る時間はない。といって権限がないことを理由に牢を開放しなければ、囚人は間違いなく死んでしまう。

一方、罪人を自由にした場合、身に及ぶ危険も考えておかねばならない。中には死罪をいい渡された囚人も何人かおり、そのまま逃亡することが考えられた。あるいは、自由の身になって短時間のうちに再犯に走らないとも限らない。そうなれば、囚人を逃がした責任を追及され、権限逸脱の罪で石出は切腹になる。

石出には妻と彼の年老いた母、それに元服したばかりの息子と幼い二人の娘たちがいたから、自分が咎めを受ければ彼らの生活は困窮する。

究極の判断を迫られた彼は、ついに苦渋の決断をした。

『どうせ連中は罪人だ。このまま死なせても世間の人は何もいうまい。むしろ囚人を逃がす方がご法度だ。そんなことで切腹になるわけにはいかない。火が収まれば平穏な日常にも戻れる。これは今だけの話なのだ。家には自分の大切な家族がいる。どっちが大切か、考えなくてもわかる。自分の安っぽい正義感で大切なものを失うべきではない』

ところが、そのように決断した後もなおしばらく逡巡した。しかし、結局、彼は施錠したまま逃げるよう、牢番たちに指示を出したのだった。

権十と助三はそのとき小伝馬町の牢の中にいた。彼らは前年の秋、外神田の豪商「桔梗屋」に押し込み強盗を働いて捕縛された。

口に入るものが水だけという生活が続いたとき、彼らの短絡的に考えたことが強盗だった。

はじめは奥座敷の手文庫に有るはずの百両という大金を奪うだけの計画だった。ところが逃亡する段になって、大番頭と手代に見つかり誰何された。騒ぎが大きくなるのを怖れた権十は、持っていた匕首で咄嗟に大番頭を殺害。手代にも傷を負わせたが、こちらの方はかろうじて一命を取り留めた。

二人はかつて桔梗屋の下働きをしており、手代は彼らの顔をよく

憶えていた。すぐに捕まり、権十には死罪、助三には島流しが即刻申し渡された。

火が押し寄せたとき、二人はかえってすっきりした思いだった。浮世に嫌気が差していたこともあって、早々と生きることを放棄したのだ。

ところが、収監されていたほとんどの囚人は死にたくないと思った。泣き喚き、叫び、口々に釈放を要求したのだ。

「おーい、頼む。ここから出してくれ！　俺は死にたくない。俺は死罪でも何でもないんだ。何で死ななきゃなんねぇんだ！　頼む、助けてくれぇ！」

哀願だった。どんなに辛い過去があり、どんなに取り返しのつかない重罪を犯した人間でもこの世に未練はある。簡単に生を諦められるものではなかった。

その間にも牢獄の壁や床板はますます熱くなり、胴衣にも火の粉が降ってきた。

すると、突然、ひとりの囚人が叫んだ。

「おい、みんな！　このままじゃ焼け死ぬ。みんなで牢の壁をぶち破ろう！」

叫びに呼応した囚人の何人かが必死の形相で壁に体当たりを始めた。だが、分厚い板壁はビクともしなかった。

権十は平静だった。そんな連中を無視するように助三に話しかけた。

「助三よ、いよいよ観念するときが来たようだぜ。俺はどうせ死罪。どちらにしても同じようなもんだが、お主はまだ生きられたはずだ。残念なことになったな」

助三もさっぱりした表情で答えた。

「俺の方も遠島じゃ、生きた空もない。これが潮時ってもんだろう。俺の浮世はろくなものじゃなかったからな。毎日が食うや食わずじゃ何も楽しくなかった。どうして生きるのか、俺にはわからなかったよ。死ねばすべてが楽になるってもんさ」

権十は拍子抜けがした。助三はもっと生に執着すると思っていたのだ。

「それにしてもあの連中を見ろ。生にしがみついて醜態だぜ」

「まぁ、そういうなって。俺は連中の気持ちもよくわかる。生きてさえいれば、楽しいことだってたまにはある。俺もそうやって生きてきたからな」

助三はそういって、熱くなった牢内の畳の上に大の字になった。よほど度胸の据わった男である。常日頃、権十はそんな助三に好感

を持っていた。

石出は牢番たちに逃げるよう指示したものの、依然として心にひっかかるものを感じていた。何かしらいつもと違う感覚なのである。

そんなときだった。ふと牢に目をやると、石出の方をじっと見ているひとりの囚人がいた。男と目が合った。その目が石出に囁いたのである。

『俺たちは罪人だが、お役人さん、あんたと同じ人間だよ。それを見殺しにしてまで、あんたは自分だけが可愛いのかい？　いま、あんたは六十人もの人間を殺そうとしているんだぜ。そんな風に生きて、これからまともにお天道さまと顔を合わせて生きていけるのかい？　結局、あんたは死ぬことが恐いんだよ』

もとより石出の錯覚である。だが、彼は自分の内心を見抜かれたような恥辱を感じた。自分は、本当は死を恐れているのではないか。家族のことを思っているようで、実は武士の最も大切な本分を忘れて死を恐れているのではないか。武士道にも、そして人道にも外れることをしようとしているのではないか。

そこまで考えたとき、突然、石出は人間として為すべきことを実行しようと従前の決意を翻した。牢番たちに怒鳴ったのだ。

「逃げるのは暫し待て！　私の責任においてすべての牢を開放せよ！　その後で囚人たち全員を内庭に集めてくれ！」

奉行を無視する大きな決断だった。彼は迷いを振り切った。

一方、牢の縛りから解放された囚人たちには、生還した安堵と同時に不安も生じていた。石出はそんな囚人たちに向かって決然と叫んだ。

「私の命に代えて、お前たちを釈放する。だがこれはお前たちの身の安全を図った一時的な措置である。いいか、火が収まったら逃げることなく、必ず浅草新寺町の善慶寺に戻って参れ。逃げれば必ず追っ手を差し向ける。必ず戻るのだぞ。それがお前たちの身のためでもある」

本所深川の三軒長屋に住む、駕籠かきの弥助は年老いた母との二人暮らしだった。無類の親孝行で、母のためにはいつ死んでも構わないと考える男である。その母がにわかに病んだ。老齢だからいつかは病み、そして死ぬ。だが、弥助には到底受け入れられる現実ではなかった。

駕籠かきの手間賃は思うほど高くない。また不安定だった。それでも日々の暮らしには足りた。が、母が病んで医者にかかるとたちまち困窮した。薬は毎日飲ませなければならないのにその金がなかったのだ。

弥助が囚人となったのは、夜陰に乗じてのひったくりである。真夜中にお遊びから帰る旦那衆の一人を狙った。しかしいとも簡単に失敗した。偶然通りかかった侍にみね打ちを食らって気絶し、番所に突き出されたのである。

それからの弥助は、牢の中にあって後悔に身を焦がした。

『切羽詰まったとはいえ、何と無分別だったことか。これでは、おふくろを自分の手で死に追いやるようなものだ』

長屋では老母の面倒を見る人が弥助以外にいなかった。母を独りぼっちにさせたことで罪の意識が高まり、母が死ぬなら自分もこのまま死んでしまいたかった。母と一緒に生きることが、彼のすべてだったのである。

その弥助。石出によって自由を得ると一目散に深川の長屋に走った。一刻も早く母親の無事な姿が見たい。深川に着くと、幸いなことにまだ火は届いていなかったが、長屋全体が喧噪の中にあった。人々は右往左往し混乱を極めている。

引き戸は開いていた。意外なことに、隣に住む平蔵がどこから持ってきたのか、大八車に母を載せようとしている。

「おっかさん、俺だよ！」

思わず弥助は叫んだ。薄目を開けた母が弱々しく微笑んだ。

「おう、弥助か。丁度よかった。お前のおっかさん、だいぶ弱っちまったが、大丈夫だ。それ、手を貸せ！　車に載せるんだ」

弥助は感激した。日頃から仲違いをしていた平蔵が母親の面倒を見ている。信じられない光景だった。

「平蔵さん！　恩に着るぜ。あんたには一生頭が上がらない」

「そんなことはいい！　早く手伝え！」

「すまない。本当にすまない。だけど、どうしてそんなにまで？」

「どうしてって？　そりゃぁ、お前のおっかさんが難儀しているのをそばにいる俺が見過すわけにいかないだろ。俺だって人間だよ」

弥助は胸がじんときてしまい、心の中で手を合わせた。

『火が迫る中、平蔵さんだって逃げる必要があるのにおふくろの面倒を見てくれた。小さないさかいがあって以来、口も利かない仲だったが、助けようと一生懸命だ。小さなことで平蔵さんを恨んだ俺という奴は、やっぱりちっぽけな人間だった。この人にはどれほど感謝しても足りない』

母を大八車に載せ、長屋の外に立ったとき、平蔵が弥助に訊いた。
「お前、この火事で牢屋から出してもらったんだな？」
「有難いお役人さんがいてね。助けられた」
「そうかい。そのお役人に感謝するんだな。火が収まったらまた牢に戻るんだろ？　戻った方がいいぜ。おっかさんは俺がなんとか守るからまかせておけ。それより必ず戻れよ」
「俺は戻らないつもりだった。おっかさんがだめになったら、俺も死ぬつもりだ」
「馬鹿野郎！　おっかさんは俺が守るといっただろ。お前はちゃんと務めを果たして出て来るんだ。それにまだ若い。独りになったってどうにでも生きて行けらぁ！」
　母親は、かなり衰弱していたから、弥助が牢獄にいる間に死んでしまうことも考えられた。それが、石出の思いもかけない計らいによって帰宅できた。そのとき、母の死を見届けたならばそのまま死ぬつもりだった。だが、図らずも仲違いをしていた平蔵からの温情に接した。老母がかろうじて生きながらえたのは平蔵のお蔭だ。あのお役人様にしても平蔵さんにしても、人は案外信じていいものかもしれない。
『これからはもっと地道に努力するよ。今度はまっとうな金でお袋を助けたい。それから考えるのも嫌だが、もしもお袋に何かあっても、独りで強く生きて行くよ。それがお天道様とお袋から与えられた命に対する恩返しだ。そして刑をまっとうしてから娑婆に戻る。そうすれば平蔵さんにも恩返しができる』

　大火事は三日を経てようやく鎮火した。
　石出は、囚人たちが必ず善慶寺に戻ってくると信じていた。が、その一方で万一の覚悟も出来ていた。死罪の者のうちには、戻らない者も出るかもしれぬ。一人でも欠ければ責めを受けることになる。
　ところが、不思議なことに、そのことで焦りはなかった。実は、囚人たちを釈放した直後、石出の心は充実感でいっぱいだった。何かを成し遂げたという得体の知れない達成感なのである。
　もしも囚人たちを見殺しにしたなら、必ず後悔に苛まされる予感があった。それにも拘らず、最後まで迷った自分が情けなく思えた。だが、それもいつの間にか自分が胸を張って誇れる人間であるという思いに変わっていた。
　石出と牢番たちは善慶寺で待った。連れ立って帰ってくる数人の囚人をはじめて見たとき、彼は嬉しさのあまり胸を熱くした。囚人

たちは、続々と戻ってきたのである。
石出たちは、囚人たちを数えた。解放前の六十人という数に近づくにつれ、感動で胸が押し潰されそうになった。囚人たちを信じてよかったという幸福感である。
ところが、五十九人が戻った後、一日近くが経っても最後の一人が戻らなかった。緊張の糸がいっぺんに切れてしまい、大きな失望が胸を抉った。どんな事情かわからないが、裏切られた思いだった。
石出は戻らなかった男を思い出そうとした。考えを巡らせていると、突然、男の顔が頭に浮かんだ。苦み走った男前のあいつだ。彦次という相模屋の番頭だ。確か不義密通の罪で獄につながれた男だ。
石出は、戻った者たちを寺の各部室に待機させ、自分は独り別室で思案に入った。これで自分の人生は終わりになるに違いなかった。自分の判断が甘かったために、これから家族には苦しい生活を強いることになる。しかしそれも武士の家に生まれた宿命だから仕方がない。そう考えると、心境は澄み切ったものになった。
奉行には、勝手に牢を開放したことをすでに謝罪していたが、その後の経過についてはまだ報告していなかった。そこで、まず逃亡した彦次の事件を調べ直すことにした。すると、すぐにわかったことがある。不義密通の片割れ、つまり女の方が牢に入っていなかったことだ。
彦次は浅草田原町の米問屋「相模屋」の番頭だった。仕事のできる男で、主人市兵衛の覚えもよく、さほどの時を移さず番頭の地位まで上った。機転は利くし、人の気持ちもよく忖度できた。したがって、商売の勘所をよく押さえることが出来た。その上、粋な立ち居振る舞いと役者と見違えるほどの美形が多くの女たちの心を溶かした。そうした噂が他所から市兵衛の耳に入るにつれ、これまでにない懸念が生じ、それが日に日に増殖した。それというのも、後添えとしてもらったおみねという女が若くて綺麗だったからだ。
市兵衛は老境に入ってすでに久しい。内儀が健在の時分から数人の愛妾を別宅に囲っていたが、どの女にも満足していなかった。ところが、没落した縁者におみねという綺麗な娘がいることを知って食指が動き、内儀が死ぬと金に物をいわせ、強引に後添えにしてしまった。
おみねには善吉という好きな男がいたが、金の魅力に負けた父親から二人の仲を強引に引き裂かれた。
「お前に、好いた男がいることはわかっている。だが、わしにも都合というものがある。お前にはわしに育てられた大恩があろう。そ

れをまさか忘れてはいないだろうな？　家族が食うや食わずの状態で苦しんでいる様子はお前にもわかるな。親兄弟を助けることになるから相模屋さんに行け。相模屋さんは大きな身代だぞ。お前自身が豊かな生活を送れるというもんだ。いいか、感謝して、先代のおかみさんの後に入れ。それがお前自身のためでもある」

有無をいわせなかった。おみねは生まれてからずっと父親に逆らったことはない。逆らえるような質ではなかったのだ。彼女は憔悴した。善吉の方も絶望のあまり狂乱状態になって、ほどなくして行方不明になった。

市兵衛は大金を使っているだけに、おみねと彦次の間が気になって仕方がなかった。激しいほどの愛欲が、おみねを独占したい強い思いになっている。おみねを失うことなど、到底考えられない。自分の命の次に大切だった。彼の日々思い悩んだことは、彦次がおみねにどんな態度をみせるのか？　そしておみねの方はどうなのか？の一点だった。

市兵衛は暫らくの間、毎日気を張って過ごした。注意していたが、幸いなことに彦次がおみねに惹かれている様子はまったくなかった。おみねにしても同様に思えた。

当時、不義密通は男女とも死罪である。彦次のような分別のある男が大店の番頭という安定した地位を捨ててまで、危険な行為に出ることはありえない。それに彼ほどの男前なら、外に一人や二人の女がいても不思議ではない。市兵衛はそう考えてつい安心した。いつの間にか二人に注意を払わなくなったのである。

ところが、男女の濡れごとはまったくの別物だった。二人は市兵衛の目を盗み、旅籠をめぐっては密会を重ねる仲になっていた。どちらが先に思いをかけたのか、それはわからない。だが、男女の仲は目と目が合ううちに自然に互いの気持ちがわかる。そして思いが強くなればなるほど、どんな危険をも超えて抑えが効かなくなってしまうものなのだ。

逢瀬には大変な危険と狂おしいほどの幸福が裏表になっていた。いつも別々に旅籠に着いた。大抵、おみねの方が先だった。旅籠に着いた彦次を見たときのおみねは、実際、彦次にとって切ないほどに愛おしいものだった。顔は薄桃色に上気し、瞳は感動のあまり涙に濡れていた。彦次が部屋に入ってくると、いつもその胸に飛び込んだ。

「彦次さん、会いたかった。苦しくて、どうにかなりそうよ。どうか私を捨てないでね。あなたといつまでも一緒にいたい」

彦次は笑った。

「おみねさん、何を馬鹿なこといっているんだい。俺があんたを捨てるはずがないだろ。それに毎日会っているじゃないか」
「いいえ、毎日会っているのは番頭の彦次さん。会いたいのは、私だけの彦次さんなの」
彦次はおみねがいじらしかった。逢瀬の度に、それが今生の最後の出会いであるかのように二人の心と体は燃えた。逢瀬は常に限られ、しかも緊張の中だったから、狂おしいほどに時間は濃密だった。一瞬一瞬がとても貴重で、危ういながらも凝縮した至福の時間が流れたのだ。
だが、それは長く続かなかった。出入り商人に目撃され、運命が暗転した。二人の不義を知った市兵衛の怒りは凄まじかった。湧き上がったのは、彦次に対するどす黒い怨念である。
『よくも俺の大切な女を手籠めにしてくれたな』と思った。
市兵衛の望みは、二人を引き離し彦次を獄門台に送ることだった。とはいっても、あくまでも冷静だった。すぐ感情をぶつけることはしなかった。商売は時に冷静さを要求されるが、成程、商売を大きくした男だけのことはある。じっと感情を抑えたまま、証拠を得るまで常と変わらず二人に接したのである。彼は密かに、金を使って二人の動きを事細かに探らせた。そして彼らの逢瀬のときをじっと待った。機会はすぐにやってきた。番所の役人と示し合わせ、自らも現場に踏み込んだのだ。
二人が捕縛されたとき、市兵衛はゾクゾクするような快感を覚えた。その表情は憎悪のために醜く歪んだ。市兵衛は彦次にいった。
「番頭にまで引き上げてやった大恩を忘れ、いままた俺の大切な女を手籠めにするなんて様は人間の出来る仕業ではないな。お前のような男は人間の屑の屑だ。いいかい、たっぷり楽しんだ後はな、獄門台のさらし首になってもらうよ。苦しんで、苦しんでその後でゆっくりと三途の川を渡ってもらうからな」
そこまで罵倒された彦次ではあったが、反論ができなかった。自分の方に分はなかったのだ。そしてすぐに死罪が宣告され、小伝馬町の牢屋敷に入れられた。
おみねも死罪のはずだった。が、こちらの方はどういうわけか何のお咎めもなく相模屋に戻された。
しかし、おみねには生きる気力がすでになかった。
『二人で駆け落ちしてしまえばよかった。もうこの世に未練はない』
彼女は生気を失い、死ぬことばかりを考えた。だが、そんな様子にも拘わらず、市兵衛は彼女の体を執拗なまでに求め続けた。自分の欲望さえ満たせばいい市兵衛に、おみねは愛情の欠片も感じなか

った。市兵衛をはじめ、世間というものがますます嫌になった。願いは、彦次とあの世で再会することだけだった。

一方の彦次だが、当初、おみねが市兵衛のもとに戻った事実を知らなかった。それが牢に入って数日後、牢番同士の会話を偶然、牢の片隅で耳にした。

「おい、知っているか？　彦次とおみねの件だけどよ」

「二人とも死罪だろ。彦次という男も馬鹿なことをしたもんだよな。女なんてものはよ、世間にいくらでもいるのによ。それに、あの男前だ。女なんてすぐ見つかるぜ」

「そんな話じゃねえよ。女の方が旦那に引き取られたって話だ」

「ははぁ、そうかい。さてはまたやったな。これは、きっと笹岡の旦那の仕業だぜ」

「笹岡の旦那ってのは、あの与力の」

「しーっ。これは内証だぜ。きっと市兵衛の賄賂だよ。笹岡の旦那、昔から金に弱いという噂だからな。手下と山分けでもしたんだろう」

何も知らなければ静かな気持ちで死出の旅に出られたはずの彦次は、この会話で激しく動揺した。市兵衛とおみねに裏切られたと思った。

それからというもの、彦次の心は乱れに乱れ、掻きむしられ、そして悔しさと無念に苛まれた。市兵衛に優しく微笑みかけるおみねの姿が妄想となって彼を苦しめた。

『俺はおみねと市兵衛に復讐せずには死ねない。絶対に奴らを殺す！』

そんな執念を固めつつあったときに、小伝馬町に火が迫ったのだ。彦次はしめたと思った。脱出が可能になるかもしれない。

だが、混乱時に無理して牢破りを犯す必要はなかった。囚獄が自ら牢を開放したのである。神仏が自分に復讐の機会を与えてくれた、と彦次は思った。

釈放された彦次は、すぐその足で相模屋に向かった。途中、刃物問屋に寄り、そこで匕首を盗んだ。誰もが逃げるのに必死で、咎める者はいなかった。

田原町に着いたとき、界隈はまだ火に襲われていなかったが、いつ灼熱地獄という魔の手が伸びないとも限らない。

相模屋では、市兵衛をはじめ大勢の使用人たちが店の貴重な品々や商いの米俵をたくさんの大八車に積み込んでいた。そこに匕首を手にした彦次が、突然、姿を見せたのである。使用人たちは驚愕し激しく動揺した。

彦次は使用人たちには目もくれず、おみねと市兵衛のいる奥座敷へとまっすぐ進んだ。市兵衛はいち早く彦次に気づき、腰を抜かさんばかりになった。匕首を目にした怖れのためか、運ぶ荷物が手につかない。

彦次が市兵衛の目をじっと見て、太く低い声で静かにいった。

「相模屋の旦那、三途の川を渡る前にちょっと寄らせてもらいましたぜ。旦那とおみねにも一緒に渡ってもらおうと思いましてね」

市兵衛はぶるぶる震え出し、あっという間に玄関先へと駆け出した。

彦次は一瞬追いかけようと思ったが、おみねを殺す方が先だと思った。あれほど情熱的に愛した女だ。裏切られた思いがそれだけ強い憎しみに変わっている。

ところが、おみねに向かって歩を進めると、どうしたことか、おみねは逃げる素振りを一切見せなかった。それどころか、目に涙を湛え、微笑むように彦次に近づいてきた。それから目を瞑って手を合わせ、彦次の前に正座した。

「彦次さん。許されない恋をした私は、捕まったとき、本当はあなたと一緒に死にたかった。生かされたために非道を彷徨いました。あなたに殺されるのなら本望です。裏切った私をどうか先に殺してください」

聞いた途端、彦次は愛しいと思ってしまった。様々なわだかまりがあっという間に氷解した。そしてあらためて知った。やはり、俺にはおみねが最高の女だ。抱き寄せたとき、彼女の熱い吐息が彦次の首筋にかかった。夢中で唇を吸った。

それから市兵衛の逃げた玄関の方に目をやったが、すでにその姿はなかった。

彦次は市兵衛を見下げた。

『ふつうなら、なりふり構わず俺と闘おうとするのが本当の男というものだ。それが愛した女に対する証し、ひょっとしたらそれが人として生きる誠ではないのか？　それに俺という男に対する意地はどこに行った？　男なんてものは、自分の命以上に大切なものを追い求めることがある。女の場合もあるだろうし、もっと大義の場合もある。それはどっちだっていい。そういうときにこそ、男の真の価値がわかるというものだ。どうせ遅かれ早かれ人間は死ぬ。命なんてものは捨てるべきときに捨てないでいつ捨てるというんだ？』

気が抜けた。これが市兵衛という男の正体なのだ。が、それでかえって心が決まった。

『俺はおみねを連れて江戸を出る。とりあえず中山道を抜けて大坂

方面に向かう。捕まれば、おみねと一緒に死ぬまでだ。愛する女と死ねれば、つまらない浮世もまずまずだ』

別室で思案していた石出に、そのときふと閃くものがあった。おみねが獄にいないのは、相模屋の賄賂ではないのかということだった。同様の事例が過去にもあったからだ。もしそうなら、彦次とおみねを何としても捜索し、捕縛するよう奉行に進言しなければならない。

そう決めた矢先のことだった。善慶寺の庭先に血相を変えて、ひとりの老人が飛び込んできた。見ると、しみが顔の全面に浮き出ており、皺も深い。ギラギラと光る金壺眼も異様である。

相模屋の市兵衛だった。その相模屋。運のいいことに類焼を免れ、屋敷はもとより、家財道具一式それに商売物など、市兵衛にとって自分の命の次に大切なおみねを除いてすべてが無事だった。

市兵衛は石出に土下座して訴えた。

「囚獄様、相模屋の市兵衛でございます。お願いがございます。手前のおみねを奪い返して欲しいのでございます。火事の最中、男に連れ去られました」

何本か歯の抜けた市兵衛の口から泡が飛んだ。土下座したままで捲し立てている。

「犯人は、元番頭の彦次でございます。脱獄した彦次の奴がおみねを連れて逃げたのでございます。手前にはおみねという女が必要なのです。あの女なしに生きて行けないのでございます。どうか、この年寄りに情けをおかけいただき、おみねを連れ戻して欲しいのでございます。おみねをどうか…。どうかお願い…」

汚い年寄りが、恥ずかしくもなく彦次と女のことで捲し立てている。石出はその姿を見て失望した。こいつの人生はどこかおかしい。

途中から何も聞いていなかった。直前まで彦次を捕えることを考えていたが、今は別のことを考え始めていた。

『ご法に照らせば、確かに彦次の罪は明らかだ。だが、そうはいっても若い男女が結びつくことの方がより自然の道理といえるのではないか？』

しきりに訴える市兵衛に対し、石出はしばらく無言だった。

『この男、どう見ても欲望の塊だ。一体いくつになるのだろう？　調べたところでは、おみねはまだ二十歳そこそこだ。何とも若い女を後添えにしたものだ。それにしてもどういうことだ？　この男、まったく女の気持ちを理解していない。女の心はとっくにこの男から

離れている。あるいは、初めからなかったかもしれぬ。それにも拘らず、未練たらしく女を追い求めている様はまったくの醜態である。その気持ちが理解出来ぬ』

石出はすでに結論を下していた。直前までの気持ちが変わってしまったのだ。彦次は牢から逃げる途中で焼け死んだことにし、賄賂に負けた番所の役人の罪も伏せたままで奉行に報告することにした。

『いまさら、奉行にすべてを報告したところでどうなるものでもない。それより監督不行き届きを明らかにすることで、名奉行の誉れに傷がつく恐れもある。何よりもこれまで通りに優れたお裁きを続けてもらうことの方が世間にとってどれだけ大切なことか』

石出は真っ直ぐ市兵衛を見据えてから申し渡した。

「市兵衛、おみねは諦めよ。おみねを大切に思うのなら、彦次との幸せを祈ってやれ」

すると、市兵衛は目を剥いて怒り出した。

「何をいわれる！　おみねは手前の女。この市兵衛、そんな理不尽なおっしゃり様には絶対に承服できませんぞ！　こうなったら、お奉行様に訴え出るので、どうか、そのお積りで！」

意外にも強く出てきた市兵衛に対し、石出は釘を刺した。

「いいか、市兵衛。承服できずに、番所に訴えたりまた他言すれば、お前が役人を買収した一件が当然明るみに出る。もとよりお前もその役人も大罪。ゆえにともに捕縛、投獄の末厳しく吟味されるが、それでもよいか？」

市兵衛は悔しさのあまり胸が苦しくなった。といって、おみねを取り返すために、そこまで危険を冒したくない。悔しかったが、市兵衛は黙らざるを得なかった。

奉行からの正式の沙汰は、それから数日後にあった。

石出の規則破りは不問になるどころか、逆に前例のないことを実行した勇気が賞賛されたのである。

沙汰の翌日、石出は戻った五十九名をあらためて善慶寺の内庭に集めた。

「よく、帰ってくれた。お前たちを信じてよかった。私はいま感激している。心から礼をいわせてもらう」

すぐに牢名主として隠然たる力を持つ男が続けた。

「囚獄様、お礼をいうのは俺たちの方でございますよ。命を助けていただき、本当にありがたかった。これから…」

牢名主はさらに何かいいたいようだったが、ひとりの男が突然話

を遮った。あの権十だった。
「囚獄様、俺にもいわせて欲しい！」
囚人たちの間で、小さなざわめきが起きた。牢名主が権十を睨んだ。
「俺は人を一人殺して死罪の身でした」
ざわめきが消え、その場にいた全員が水を打ったように静かになった。
「だから、俺は善慶寺に帰っても、どうせ死ぬ身。それなら、このまま逃げようと少しは思いましたよ。そうやって、これまで自分のことしか考えずに生きてきたんだ。
でも、俺は囚獄様のことを考えてみた。あの人は俺のような、はみ出し者でさえ信じてくれた。もしも、俺たちが逃げて戻らなかったら、きっとあの人は切腹になる。自分たちによくしてくれた、そんな有難い人を、こんな俺でも裏切ることはできなかった。せめて人生の最後にたったひとつでもいい、いいことをして死のうと思ったんですよ。だから、ここに戻って、いまは心が晴れ晴れとしています。恩に報いるのに命は惜しくないと思ったんでございます。俺はいま、すごく爽やかな気持ちなんですよ」
権十の言葉を聞いた石出は感動した。根から悪い人間などいない。権十の場合も悪事のきっかけは生きたいという強い気持ちが唯一その理由であって殺人は故意ではなかったのだ、と思った。
それから彼は囚人たちに対する奉行の沙汰を話し始めた。
「伝えたいことがもうひとつある。お前たちのこの度の殊勝な行動に対し、お奉行様から有難いご沙汰があった」
石出の顔が自然とほころんだ。
「喜んでくれ。お前たち全員の罪一等が減じられることになった」
囚人たちから期せずして歓声が上がった。涙ぐんでいる者もいる。
「死罪の者は島流し。島流しの者は短期刑。ひったくりや置き引きの類は放免とする！」
死罪だった者は島流しになる。権十もそこで真面目に務めれば、島の娘と結ばれて人並みの幸せもつかめる。
短期刑に減じられた助三も心に誓った。
『真っ当に刑を務め上げ、人の道に外れぬよう渡世をする。それが俺に与えられた新たな運命だろう。努力すれば、いいことだってきっとある。それを信じて生きて行く。それが石出様に対する恩返しかもしれぬ。浮世の憂さも心がけ次第というじゃないか』
石出帯刀という男によって、彦次を含む六十人の男たちは、こうして人生をやり直すことになった。

そして、石出自身の処遇についても触れておきたい。

彼はこれまでどおりに囚獄を務めることは勿論、禄高を加増された上に科人の吟味、さらには大火を含む天災地変に際しては、彼自身の判断で囚人を解放する権限までもが与えられたのである。

（了）

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に2回発行する等の文芸活動を行う。

・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトにその全文を発表する。

・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し、発表する者とする。

・会員は、年会費千円を負担すること。ただし、年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。

・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。

・作品の長さについては特に規定しないが、1回に掲載できる枚数は、原稿用紙で１００枚以内とする。

・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

霜月から師走まで

いんば華子

窓の外アイツもコイツも忙(せわ)しない
一月早いホワイトクリスマス

太陽の威信をかけた企みは
脱がしてみせよう鎧のマント

葬式は残された人のためだと
昔読んだ歌を思い出す

来世まで会えない人が居るところ
特別便で林檎よ届け

話すのも生活なんだいきているんだ
スーパーよりも市場が好きだ

颪(おろし)吹き澄んだ空気充たされる
神々の棲む輪廻の中心

☆

冬の日の友へ（一）

中川とら

楽しいことばかりの
生活なんて　ないよ
そう言う　あなたの　顔（かんばせ）は
うらやましいほど　凛々しい

時に　ゆっくり休みながら
それでも　わたし達は
次の目標を目指す

負けた時にこそ
勝利への　覚悟は
生まれるものなのかも　しれないね

冬の日の友へ（二）

あなたのようになれたらと
がんばってきた日々
振り返れば
しっかり自分自身をつくっていたなんて
うれしい

わたし達は

人の中で　もまれ　励まされ
力をもらいながら
生き抜いていくものなのかもしれない

いっときの評価など
明日になれば色あせてしまうものだ

冬の日の友へ（三）

安心は
誰かのやさしい言葉に
ふれた時　広がっていく

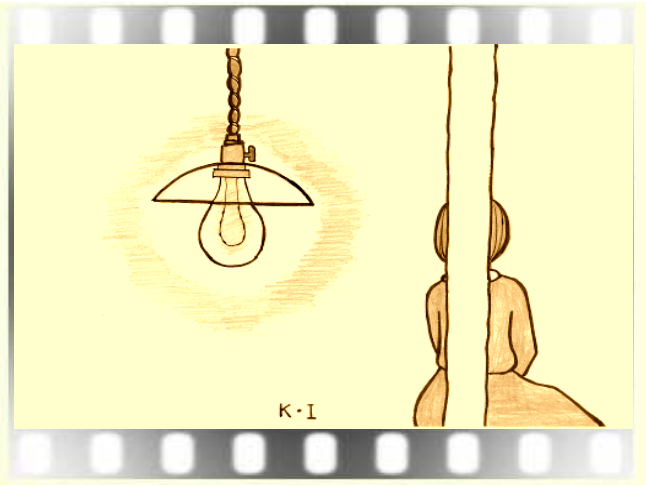
相談しようと思った瞬間
すでに心は　不安を乗りこえている

◇

そよのバアバの空中サロン

―その二　灯下の詩人―

中川　とら



今年も又、和音ちゃんの苦手な冬がやってきました。

（寒い日は、きらい。何もかもが堅く冷たく縮こまるから。風景も気持ちも体だって、春や夏のようには動きにくい。

だから、冬はおばあちゃん家の炬燵が恋しい。何はさておいても学校の帰りは高層マンション十三階のそこに直行したくなる。体までスッポリもぐり込んで横になり、じっとして目をつむる。こうしてやっと、わたしはやわらかくなるのだ。

それに、冬は希望を持ちにくい。水分の足りなくなった脳みそが、弾力を失っていく感じ。気が小さくなって、不安が大きくなる。

興味のない友だちの話に相槌を打つのが面倒くさい。おもしろくもないのにニヤニヤしているのも空しい。自分の未来さえ見えにくくなって、したいことがわからなくなっていく冬は、本当にいや。）

おばあちゃんは「まるで冬眠にはいった中学生パンダのようだわ」と笑っています。

そんな暮れも押し迫った冬休み、和音ちゃんの大すきな温

かいココアをいれてくれながら、おばあちゃんが昔々のある冬の日の話をしてくれました。

あれは、確かわたしがまだ小学生の頃のことだったと思うわね。

いつもの「あれは、確か……」が出てくると、いっきにセピア色のフイルムがカチャカチャと音をたて回り始めました。ナレーションのそよのバアバの声は、心地よく和音ちゃんの耳から脳へと送られていきます。

冬の夜だったかしら。その人が来るのは。そう、どう思い出しても、確かに冬の夜でした。

玄関の戸がガラガラと開き、

「こんばんわ　パン屋の蒼です　お、奥さん居ますか？」

太く艶のある一本調子の声が、はっきりと耳に残っています。

住宅を離れた駅の近くに、ちょっと名の知れた人気のパン工房があった。友達と何度か行った事があるが、店の辺りに近づくと、パンの香ばしいにおいがしてきて、いつも内はパンを買う人達でいっぱいだった。

どう言う訳か、寒さの厳しい年の瀬、それも忘れかけた頃、その日売れ残ったパンを持って来てくれる人がいて。それが蒼ちゃんだった。当然、ただという事はなかったが、全く店で買う値段ではない。

何故、我が家にきてくれるようになったのか、母に聞くところによると、蒼ちゃんは工房の御主人の奥さんの遠縁の人だった。小さい時の大病が原因で、知能と歩行に少し障害を負い、大人になってもなかなか仕事に付けずにいたので、奥さんが簡単な作業ぐらいなら出来るのではないかと、引き取ったのだ。思った通り真面目な働きぶりで、そこそこ順調に年数が過ぎていった。

たまたま、ある日売れ残ったパンを小遣い稼ぎになるだろうと、少し離れた住宅に売りにやらせた。始め奥さんは、言葉のたどたどしい蒼ちゃんが人と話しパンを売るのは、難しいだろうと考えていた。が、行く度にパンはきれいに売り切れる。本人も喜び、店も助かるというもので、回が重なり、やがて我が家もそのお得意さんの一軒になった、という事らしい。

この年の十二月も、忘れかけていた頃だった。
玄関に入った蒼ちゃんは、古くて大きな茶箱の様なパン箱を「よいしょ！」と置き、蓋を開けた。出来たてではなかったけれど、微かに香ばしいパンのにおいが残っている。
「さて、今日は何にしようかしら」
母が中を覗く。
「あ、あんパンが美味しいです！　メ、メロンパンも美味しいです！」
「そうね」
暫く考えた母は、
「あんパンとジャムパンを下さい」と言った。
「はい！」
節くれた指で、手際よくパンを包む蒼ちゃん。
「あれは、あるかしら」
母は蒼ちゃんの顔を見た。
「はい！」
蒼ちゃんは、箱の隅の方から半紙のようなものに包んだ物を出し
「き、今日はサービスです！」と、恥ずかしそうに母の前に出した。
「ありがとう！　いいんですか？」
食パンの耳をもらった母は、嬉しそうな表情をし、受けとる。
「おう　蒼ちゃん。久しぶりだねー。元気でやってるかい」
奥の部屋から出てきた父が懐かしそうにニコニコ笑いながら、パン箱の後にあぐらをかいた。
「へへへ……、ま、まぁまぁです」
そう言って、蒼ちゃんは頭をかいた。
「寒くなったからなぁ。　母さん、座布団、持って来いや」
父は母が持って来たそれを蒼ちゃんにすすめた。
蒼ちゃんは申し訳なさそうに座ると、今度は緊張して軽くため息をついた。
私は廊下の柱の陰で蒼ちゃんを見ている。蒼ちゃんは、坊主頭で色黒の人だ。しかし、広く秀でた額、その下の太く真直ぐな眉、大きく落ちつきはらった澄んだ目、高く整った鼻、理知的なくちびると、まるでインドの哲学者のような風貌をしていた。年の頃は、母に聞くと三十になったばかりらしい

ということだった。
話の合間に時々チラッとこちらを見ることがあったが、そんな時の蒼ちゃんは思いつめたような真剣な目をする。
私は少し笑って軽く会釈したが、目を合わす度に何故か心臓がドキッドキッと鳴った。
「あ、あれをやりましょうか！」
突然蒼ちゃんがそう言うと、父は
「おっそうだ、久しぶりに聞かせてもらおうか」と、背筋を伸ばした。母も隣りに正座し、私は柱の陰に座った。四十ワットのほの暗い玄関で、おもむろに起立した蒼ちゃんは、姿勢を正しゆっくり口を開き、よく通る落ちついた声で始めた。
「一　十　百　千　万　億　兆　京　垓　秭　穣　溝　澗　正　載　極　恒河沙　阿僧祇　那由他　不可思議　無量　無限大　ふー」
「大したもんだな、蒼ちゃん。うん、大したもんだ」
父は心から感心して、彼を見上げた。紅潮した顔がつやつやして、湯上りのようだ。
「どこで覚えたの？」
母が尋ねると、蒼ちゃんは
「べ、勉強……」
そう言って、きれいに揃った白い歯をいっぱいに見せて、にっこり微笑んだ。
「なんだか生命の永遠を聞く気持ちになるわね。ほんとうに。来年もまた蒼ちゃんが来るのを、楽しみにしているわ。寒いから、どうぞ体に気をつけて。よいお年を迎えてください」
「あ、ありがとうございました」
母の言葉を潮時に、蒼ちゃんは几帳面に帽子を目深く被り、礼をして帰って行った。蒼ちゃんの自転車が庭の生垣から遠ざかったのを確認し、母は玄関の明かりを静かに消した。
蒼ちゃんが帰った後、私は不思議で頭がいっぱいになる。
どうして、あんな難しい事を知っているのか。どうやって、勉強したのか。学校に行かない人が、どうやって本を読むのか。どうして、蒼ちゃんの左目は時々右目と違う方向を見るのか。一人で寂しくないのか。一生、結婚はしないのか。家族は、どこで何をしているのか。泣いたり、怒ったりする事もあるんだろうか。
部屋に戻る母に私は、
「蒼ちゃんの目ってさ　ちょっと……」と言った。母は、口

の中で答えを捜すようにしていたが、急に表情を変え
「そよのちゃん、あんたそうやって人様の顔をいつもジロジロ見ているの？　それって、大変失礼なことなのよ！　見られる人の心を考えなさい！　先方も、そうするあんたの顔を見ているってこと！　あんた自身も見られていますよ」
説教が始まった。
父が、私の傍に来て言った。
「蒼ちゃんの右目は現実を見て、左目はね、無限大を見ているんだよ」
「無限大って！」
「それは、そよのがこれから勉強していくことだ。彼は、詩人かもしれないな」
「……？」
その夜、私は小さい頃読んだ『ジャックと豆の木』もどきの夢を見た。
天空を目指し登っていくのは蒼ちゃんだ。その後を私が登って行く。細く曲がりくねった何の木だか分からない太い蔓のような枝だ。それが空に向かってするすると伸びてゆく。
私の下には、何人かの友達が次々と続いてくる。
もう既にかなり高い所まで来たのに、蒼ちゃんは休まない。
突然風が吹いて来た。枝は大きく左右に揺れ始める。私は時々下を見て、みんなを心配する。
「下を見るな！　落ちるぞ！」
友達の一人が大きい声で叫んだ。その時、雷が鳴り辺りは俄かに暗くなってきた。
やがて横なぐりの雨が降って、枝は更に大きく揺れる。恐くて泣きだしたい。
「下を見るな！」
雨に混じって、まただれかの声がした。目をつむり、必死に枝を掴んで振り落とされないように我慢した。
どの位たっただろう。雲間からうっすらと陽が指し込んで来て、明るくなり始めた頃だ。虹！　七色の虹が空に架かった！
何てきれい！　私はみんなを思い出し、下を見た。だが、誰もいない。そのかわり、雲の下に光るものが見える。川だ！川はキラキラ光りながら緩やかに曲がって流れいく。
それにしてもみんなはどうしたんだろう？　不安になっ

て今度は上を見上げた。
枝の先に確かに蒼ちゃんはいた。
「蒼ちゃん！」
私はすがるような思いでそう呼んだ。けれど蒼ちゃんはだまって、そのまま真白い雲の中に消えていってしまった。

話は終わりました。
おばあちゃんの頬はほんのりほてってピンク色をしています。窓の外は、夕刻だと言うのに、すでに日が落ちて暗くなりかかっています。
和音ちゃんは深いため息を一つつくと、
「なんだか、ステキな話だった……ありがとう、おばあちゃん」
そう言って帰り支度をはじめました。
「お家のお手伝いを忘れないでね」
お正月はもうすぐです。
「はい　大晦日にはみんなで来ます」
「楽しみに待っているわ。気をつけてお帰りなさい」

冬の空は、あっという間に群青色になりました。西の方向には、月の近くで金星が煌々と光を放っています。
目を凝らすと、幽かに無数の星々までも見えるような気がします。

いつの日か、そう、それは冬の日の夜。蒼ちゃんが、夜空からあの蔓をつたって降りてきて、また、心をふるわせるような詩を詠いあげてくれるにちがいない。
和音ちゃんは、本気でそう思うのでした。

（その二　おわり）

ラン博士の館（第二話：ベスト・ケア）

唐瀬　光

プロローグ

高尾山麓、舞鶴（まいづる）女学園（通称・鶴女（つるじょ））の西に延びる広大な森。時刻は午前零時をまわったところか。闇がすべてをおおい、立ち並ぶ木々は、さながら魔人のように枝葉を広げ、ここに侵入する者を厳しく拒んでいる。

その森を、ぼくはイバラの藪や巨木の幹をすいすいと抜けながら、足早に歩いて行く。周囲の情景は真昼のように、はっきりと視認できた。

しばらく行くと、高いコンクリートの塀にぶつかった。背丈の四、五倍はあるかと思えるその壁は、学園の敷地を城壁のように囲み、梯子なくしては何人も、それを超えることはできない。だが、立体映像を突っ切るように、なんなく通ることができた。この状況を、物理現象に反した、とても不思議なこととはまったく思わなかった。

塀を抜けるとレンガ造りの大きな西洋館があった。横長の三階建て。各階の窓には明るい光が灯り、うごめく人の

姿が影絵のように写っている。ダンスパーティーでもやっているのか、ワルツをかなでるようなテンポのよい音楽も流れて来る。

きれいに整備された幾何学模様の庭園を横切り、一階の窓から中を覗くと、十数組の男女が互いに手をつなぎ、ステップを踏みながら、ターンを繰り返している。男たちは皆、黒いタキシード。女は色とりどりのドレス。その華麗なこと。まさに西洋の舞踏会そのもの。

館の天井は高く、三階まで吹き抜けになっている。各階の踊り場にも着飾った男女が群れ集い、楽しそうに笑いさざめいている。

（自分も、その仲間に入ってみたい）

そう思った瞬間、壁のレンガを抜け、ホールの中に立っていた。踊っていた男女が一斉に振り向き、能面のような顔でぼくを凝視する。

思わず「あっ！」と叫んだ。それは、皆、ぼくの知り合い。いや、とても親密な間柄にある者ばかりだ。

なんと、その中に、ぼくの親父も交じっているではないか。彼は五十代の熟年おっさんではなく、青年のように若々しく見える。彼の相手はまだうら若き乙女。驚いたことに、こちらも学園内にある尼寺、翔鶴院（しょうかくいん）の住職代理、今はもう熟女といってもいい年齢の菖蒲尼（しょうぶに）様（ぼくの生みの親）だった。

知己なのに、なぜか彼らは見知らぬ者を見るような目で、こちらを眺めている。ひょいと自分の服に目を落とすと、裾の長い純白ドレスに変わっている。さっきまでは、男物のジーンズだったのに。

（ああっ、ひょっとして女に戻ったのか……）

実は、ぼく、立花芯（たちばなしん）（通称『シン』・高校一年）の身体は女性。自分のことを『ぼく』と称しているのは、頭脳の方が男性の構造をして、考え方、感じ方が男そのもの。幼い頃からこのギャップに苦しんで来たが、この全寮制女学園に入学してからというもの、ずいぶん気持ちが楽になった。なにせここには、教職員も含め『男』という種が存在しない。比較する対象がないのだ。

それに、この学園には、ぼくと同じ心を持つ生徒がかなりいる。同学年の黒木カズ、福地さぎり。一年上級の蘭先輩（七島蘭）など。彼（？）らとはたちまち意気投合し、親友と呼べる間柄になった。

さらに、ここには女同士がパートナーとなる聖婚という慣習がある。ぼくも梅雨の終わりに小麦色の肌をした健康美人、同じ柔道部で二年生の葵さん（伊東葵）と儀式を上げ、心の伴侶となった。

そういう訳で、ぼくは今まさに青春を謳歌しているところだ。

その葵さんや蘭先輩、ぼくの親父など、ここにいるみんながこちらを注視している。だが顔に表情がなく、まるで赤の他人を見ているような感じ。「みんな、どうしたんだよ」と一歩踏み出したところで、すべてが消え、目の前には病室の白い天井が広がっていた。

（夢か……それにしても、なんとリアルな……）

ベッドから起き上がりながら、今見た情景を繰り返し思い出す。

一週間前、世田谷にあるこの大学病院で虫垂炎の手術を受けてから、おかしな夢ばかり見る。やはり、夜な夜なオバケが出るという、学園の外に建っている崩れかけた西洋館が気になるのだろうか。だが、それも今日で退院。落ち着いたら、葵さんを誘って、あの館に行ってみよう。

ベスト・ケア

1

葵さんはいつも通り十時にやって来た。だが、ぼくの家族は親父もお袋も、誰も姿を見せない。自分たちの息子……いや、娘が退院するというのに。

葵さんと二人で荷物をまとめていると、廊下がやけに騒がしくなった。ゴトゴトとなにか重そうなものが廊下を動

いて来る。その音が病室の前で止まる。ドアが大きく開いて移動式ベッドが運び込まれた。
どうやら新たな急患らしい。この部屋が空くので誰かが使うようだ。
ベッドには数人の看護師がついており、その中に、なぜか鶴女の医務室勤務『ナースのメグさん』がいる。白いベッドが向かいの壁際に置かれる。そこには一人の老婆が横たわっていた。ぼくは、そのお婆さんを見て驚愕した。
「翔鶴院様！」
なんと、舞鶴女学園の原点となった尼寺、翔鶴院の当主ではないか。
「シン君、こっちのスペースを使うからね」
メグさんはそう言い残すと、ほかの看護師たちとともに、あわただしく出て行く。入れ違いに、鶴女の校医をしている松原律子先生と切原浜美女史（通称・ハマちゃん）の『外科医』コンビが入って来た。
「先生、なにがあったんです？」
翔鶴院様の診察を新米のハマちゃんが行っている。それを腕組みして眺めている松原先生に尋ねた。
「転んだのさ。レントゲンやＣＴで見ると、骨盤骨折だね。それもかなりひどい。なにせ去年に続いて二回目だから」
「手術ですか」
「手術が一番だけど。う～ん、難しいね。なにせ高齢なので。身体がもつかどうか……」
「先生、治りますか」
それまで、黙って事の成り行きを見守っていた葵さんが、卵型のきれいな顔を心配そうに傾ける。
「まあ、折れた骨をつなぐ手術はしなくちゃならないね。あとは自然治癒を待つ。ここに一ヶ月入院して、次にリハビリ。なんとか歩けるようになるまで、三ヶ月はかかるだろうよ」
「ええっ、そんなに……」
「老化が激しいからね。問題は、その間、自分一人じゃなにもできないってことさ。無理に腰を動かしてはいけない。かなり本人の忍耐がいる治療だが、認知症の翔鶴院様に、それが理解できるかどうか」

そう言って、今は眠っているのだろう、ベッドにぐったりと横たわっている老婆に目を移す。それから思い出したように首を上げ、ぼくと葵さんを交互に見つめる。

「ところで、院長から君たちにお話しがあるそうだ。『シン君と葵さん、この二人そろったら、連れて来て欲しい』と言づけがあった。今から一緒に院長室に行こう」

「先生、それ退院のことですか。でしたら、なにも院長室でなくても」

葵さんが首をかしげる。

「まあ、退院の話もある。それと、ちょっと……」

松原先生は言葉をにごしながら、ぼくたちをうながすと、足早に廊下に出る。ぼくと葵さんは不審に思いながらも、彼女の後について行く。

ベッドでは、裾長の診察衣に身を包み、首に聴診器をかけたハマちゃんこと切原女医が、翔鶴院様の腰をさすったり、胸をなでたりしている。姿だけは、どこから見ても、いっぱしの臨床医だ。

大学病院の院長室というからには、豪華な個室を連想していたが、実際は院長個人の事務所。やや大きめの机には、デスクトップのパソコンが居座り、周囲の本棚には医学書などがぎっしり詰まっている。机の横には大きめの段ボール箱がいくつか並んでいた。

三人が入って行くと、パソコンの液晶画面に見入っていた院長らしき白衣のオバサンが顔を上げた。「やあ」と片手を上げ、机の前に置かれている一対のロングソファーを指差す。

うながされて、ソファーの一つに葵さんと並んで掛ける。対面して松原先生。院長は使っていたパソコンの画面を切り、デスクをまわってこちらにやって来る。そして松原女史の隣に腰を下ろすと、おもむろに話しを切り出した。

「えっ、退院はしばらくなし……？」

なにを言われているのか理解できなかった。葵さんも唖然とした顔をしている。松原先生に目を移すと、こちらは事前に言われているらしく、わずかにうなずきながら真っ直ぐぼくの目を見つめている。

「どうして？　もうなんともありませんよ。事後観察だったら、毎日でも通って来ますから、すぐ退院させてくださ

い」
　ところが院長は意外なことを言う。
「退院は退院です。ただもう少しあの病室にいて欲しいのです」
「えっ、退院しても、まだあの部屋に？」
「夜、寝泊まりするだけです。昼間は自由に外出していいのです」
　わけがわからず、松原先生の方を見たが、彼女も「それが、いいでしょう。担任の私が許可します」と、簡単に同意する。
「それは、つまり、シンに翔鶴院様の介護をしろということですか」
　葵さんが身を乗り出すようにして詰問する。
「介護ではありません。ただ、あの方と同じ部屋に寝泊まりするだけです」
　院長は葵さんの非難するような鋭い視線に臆する様子もなく答える。
「つまり、夜、一人だけにしたくないと……」
「端的に言えば、そういうことになります。あの方は夜をとても怖がる。誰かがそばにいないと、よく眠れないのです」
「それだったら、なにもシンでなくても。プロの介護人を雇えばいいじゃないですか。大体こういうことは、親しい身内の方が行うべきです。実の娘でいらっしゃる菖蒲尼様とか」
　葵さんは院長の目をみつめながら、はっきりとものを言う。
（さすが、生徒会の役員……）
「見ず知らずの人ではダメです。あの方は米寿をとうに過ぎた高齢。今度の事故がなくても、残る人生はもうわずか。わびしい夜中などには『娘に会いたい』と泣いていらっしゃるとか」
「娘に……？」
（娘って……翔鶴院様の娘って、菖蒲尼様。毎日、同じ屋敷で暮らしているのに？）
　不思議に思っていると、松原先生が噛んで含めるように説明する。
「もちろん実の娘といったら菖蒲尼様、本名・正子（まさこ）様と、

今は男に性転換している正美(まさみ)理事長しかいないのだけれど、あの方はこの二人を自分の子供だと認識していらっしゃらないの。ほら、認知症が進むと、自分の身内もわからなくなるというでしょう。それなのよ。翔鶴院様には、若い頃、四十歳ぐらいまでの記憶しかない。だから、あの方にとって『娘』といったら、正子様によく似た孫のシン君なの。色白で面長の顔。背が高く、スラッとしているところがそっくり」

松原先生が言い終わった後、すぐ院長が言葉を引き継ぐ。彼女はぼくの顔を探るように見つめながら「だから、あなたがそばにいて、なぐさめてほしい」と真意を語る。

そして「もちろんこのことは、あなたのお父様にお伝えして、承諾をいただいております」と、退院時にぼくの家族が誰も来ない理由を説明した。

あいた口がふさがらなかった。退院したら高尾にある葵さんの家で、二人だけの夏休みを過ごそうと思っていたのに。

「こ、困ります。勉強とかしなければ……」

なんとか理由をつけて断ろうとしたが「勉強？　それは心配ないよ。担任の私が言っているのだから」とにべもない。

「特典を与えましょう」

院長は身を乗り出して、ぼくと葵さんを代わる代わる見つめる。

「この病院の隣は舞鶴女子大です。そこの構内及び、校舎の中に、自由に出入りする許可証をあなたがた二人に出します。食堂のチケットもあげます。ただ夜だけは、あの方と同じ病室に泊ってください。朝、介護人が来るまでいいのです」

院長はぼくを見つめ、女子大の散策と食堂のチケットという甘い餌をチラつかせながら、誘うように語った。

ぼくは「そんな！」と叫んだ。夏休みは葵さんと二人で水入らずの生活を熱望していたので、そんな頼みはとても受け入れられるものではない。たとえ、大学の構内を自由にうろついていいと言われても。

ところが、隣の葵さんが、ぼくの意見も聞かずに「それでしたら、お受けいたします」と承諾してしまった。

（大学見物とオレと、どっちがいいんだ！）
心の中で毒づいたが、時すでに遅し。
「では、そういうことで」
院長は立ち上がると「次の手術があるから」と言いながら、そそくさと部屋を出て行く。
松原先生も「すぐ学校に帰らなくちゃ」と、院長の後を追うように行ってしまった。
後には肩をすくめて申し訳なさそうな顔をしている葵さんの姿。
（どうして？）
葵さんを横目でにらむ。
「しかたがないじゃない。翔鶴院様は、あなたと血の繋がった祖母さんなんだから」
葵さんはうつむきかげんに床に目を落とした。
（夏休みは高尾の家で、一緒に暮らすって約束していたのに）
ぼくは思いっきり不満そうな顔をしていたに違いない。

2

翔鶴院様の寝ているベッドの上に小さな明かりが点いている。そのせいで彼女の様子がよくわかる。点滴液の中に眠り薬でも入っているのか、皺だらけの呆けたような顔をこちらに向けて、ぐっすり寝込んでいる。
ぼくがその丸く縮んだような姿を眺めていると、入口のドアが静かに開いて尼僧衣に身を包んだ一人の婦人が入って来た。白い頭巾を目深にかむっているが、ひと目でわかった。
（あの人だ！）
その人はしばらく翔鶴院様の枕元にかがんでいたが、やがてこちらを向く。彼女の端正な顔がふと緩む。
「起きていたの？」
柔らかい声でぼくに話しかける。
「遅かったですね」
ぼくの声は、少しとがっていたように思う。彼女の母、翔鶴院様についていないのを責めているのではなく、実の子であるぼくの見舞いに来てくれなかったのを、とがめるような口ぶりになっていた。

（内心、待っていたのに……）
彼女がぼくの前にやって来る。白い頭巾の端が手に触れる。無意識にそれをつかんで引っ張った。頭巾がハラリと落ちて彼女の顔が丸見えになる。
思わず「あっ！」と叫んだ。
そこには、もう一人の自分がいた。ショートカットの髪。面長の白い顔。いくぶん老けてはいるが、まぎれもなく、ぼくそっくりの顔。
マジマジと見つめていると、彼女は顔を赤らめて自分の頭をなでた。
「坊主だと思ったの？」
「だって、尼さんでしょう」
「宗派によって違うのですよ」
彼女がそばにやって来る。
「ごめんなさいね、母は私がわからないの。孫のあなたを実の娘だと思い込んでいるのよ」
そう言いながら、彼女は実の娘であるぼくの胸を、やさしく抱きしめてくれた。

翌日、葵さんはいつも通り十時きっかりにやって来た。毎日、高尾の家から強い日差しの中を通っているせいか、小麦色の肌がますます濃くなって行く。
部屋の片側はもう空間になっている。翔鶴院様はベッドごと集中治療室に運ばれた。午後から腰の手術が始まる。
これは難しい手術なので、院長とベテランスタッフが行うという。新米のハマちゃんは、もちろん呼ばれていない。
ぼくたちは手術に立ち会うわけではないので、今日は院長からもらった入校許可証を使って、葵さんと大学構内を探索しようと思う。
ぼくは白い半袖シャツに、いつものGパン。葵さんは青いタンクトップに、紺色のゆったりしたガウチョパンツ。彼女の長いおさげの髪が、腰のところで跳ねるように揺れている。
二人とも顔写真入りの許可証を首から下げて、病院の玄関を出た。久し振りの外出に心が浮き立つ。真夏のムッとするような暑さも気にならない。
葵さんの後について行く。彼女は五年前、腎不全を患って、この病院に入院していた。退院後も何か月か、病院に

併設されているリハビリセンターに入所していたので、彼女にとっては自分の庭みたいなものだろう。
病院の裏手にまわると、長屋のような建物が連なっていた。緑の芝生を敷き詰めた庭には、枝を広げたケヤキの木が数本立ち並び、涼しい木陰を落としている。その柔らかい芝生の上に数人のお年寄りが座り込んで、まどろむような視線を通行人に向けていた。
「ここは介護施設よ。病院が経営しているから、すぐに医師の診察を受けられる。退院した患者が体力回復のため、一時的に入所するリハビリセンターや、ここを終の住家にする老人ホームなんかが並んでいるの。わたしも腎臓を移植した後、しばらくお世話になったわ」
老人たちの前を通る時、葵さんはちょっと会釈をした。すると一人の老婆が驚いたように顔を上げた。
「こりゃあ驚いた。アオイちゃんにレイちゃんじゃないかえ。ちょっと見ないうちに、ずいぶん大きくなったねえ」
老婆は皺くちゃの顔に笑みをたたえて一緒にいる人たちを振り向く。
「ほら、アオイちゃんとレイちゃんだよ。また歌を歌いに来てくれたんだよ。えっ、もう忘れたのかい？」
「レイちゃん？」
（葵さんは以前ここにいたらしいから、あの人たちが『アオイちゃん』と呼ぶのは想像がつくが『レイちゃん』って誰？）
「一緒に入所していた腎不全の子よ。かわいそうに肺炎を併発して死んじゃった。あの子と二人、この人たちの前で童謡なんかをよく歌ったわ」
葵さんはなつかしそうにクリーム色の建物を眺めながら、施設の庭を後にする。

青葉の茂るケヤキの並木をしばらく歩くと、コンクリートの塀にぶつかった。この向こうが大学の構内だという。塀の高さは高尾山麓の中高ほどではないが、それでも背丈の倍はある。ここも舞鶴女学園の例にもれず、男性を排除した閉鎖空間らしい。
塀に沿って歩くと、頑丈な門があった。脇に小さな詰所があって、女性の守衛が二人立っている。葵さんはその一人に胸に下げた許可証を見せ、さらにガウチョパンツのポ

ケットから生徒手帳を取り出す。続いて、ぼくもGパンのポケットから手帳を出して見せる。守衛が詰所の窓に合図すると、鉄の扉が横にスライドして、人ひとりが通れるほどの空間ができた。そこをくぐって構内に入る。

広い女子大のキャンパスには、二階、三階といった、かなり古いレンガ壁の校舎が並んでいた。大きな体育館や広いグラウンドなども見える。緑の葉を茂らせたブナやナラなどの木陰には、学生らしきお姉さんたちが涼み、この厚いさなかに肩を寄せ、互いにもたれ合っている。

男たちの姿はまず見えない。ここも高尾山麓の中高に劣らず男子禁制なのだろうか。

「まあ、先生方には男の人もいるよ。数は少ないけどね」

葵さんが解説する。

「葵さん……いや葵も、高校卒業したらここに入るの？」

「もちろん、付属の生徒はたいていここよ」

彼女は（当然！）という顔で答えた。

真夏の昼中に、広い構内をあちこち歩きまわった。暑さに疲れてへとへとになり、行き当たりの白い建物に逃げ込む。たちまち冷たいクーラーの微風に生気を取り戻す。

ここは、なにかの研究棟だろうか、長い廊下の片側に幅広のドアがずらりと並んでいる。廊下のあちこちには段ボールの箱が、無造作に積んである。

「シン、なにか飲む？」

葵さんは廊下の隅にある自動販売機の前で立ち止まった。ガウチョのポケットから革の財布を出す。

「あっ、コーヒー。ミルクコーヒー」

ぼくは商品棚の一つを指差した。

「えっ、ミルクコーヒー？　ほんと、あるんだ」

葵さんはなにがおかしいのか、ケラケラ笑ってから、百円硬貨を入れる。音を立てて受け皿に落ちた缶を、腰をかがめて取り出し「はい、シンの」と、投げてよこす。突然缶が飛んで来たので、危うく受け損なうところだった。

「あ……葵、危ないじゃないかよ」

思わずにらみつける。

「一週間も寝てると、勘がにぶるのね。そんなの受け取れなくてどうするの。それに、名前の前に『あ……』をつけるの、やめてくれない。いつまでたっても直らないのね」

葵さんはやや棘のある言葉を投げつけると、自分はブラ

ックの缶コーヒーを買った。
冷たいミルクコーヒーは、ぼくの好みなのだ。缶のピンを外してグッと一口飲み込む。胃袋がひんやりして実に気持ちがいい。

葵さんと二人、窓際に寄って冷たい缶の中身をゴクゴク飲んでいると、近くのドアが開いて、白衣を着た小柄な人物が姿を現した。髪をポニーテールのようにしているが、よく見ると無造作に後ろで束ねているだけだ。
「たく……なにが経費節約だよ。クーラーの電気代、ケチるな、ての！」
ブツブツ言いながらポケットから財布を出し、百円玉を摘む。
「おおい、なにがいいんだ！」
開いたドアに向かって甲高い声で叫ぶ。すると部屋の中から「お茶！」と若い女の声。
「まったく、あいつ、このオレを小間使いにしやがって」
硬貨を自動販売機に入れようとしたところで、ぼくたち二人と目が合った。

「あっ！」
「あーっ！」
「あら！」
三人が同時に声を上げる。
「蘭！」
「蘭先輩！」
「おまえたち！」
先輩の手からコインが落ちる。小作りの顔に驚愕が走る。部屋に逃げ込もうとしたのか、ドアの所まですっ飛んで行ったが、思い直したように足を止めて、ぼくたちを振り向いた。
「な、なにしに来た？」
開き直ったとみえて、身体の正面をこちらに向け、威嚇するように胸を反らす。
「それは、こっちが聞きたいね。蘭、あなたこそ、こんな所でなにをしてるの？」
葵さんは腕組みして、この小柄な少年（少女か？）をにらみつける。
「研究……いや、見学だ。おれは再来年、ここの医学部に

入る予定だからな」
　先輩は小さな胸をぐっと張る。
「進路見学？　それにしては、ずいぶん場慣れしているようね。まるで、ここの学生か研究員みたい」
　葵さんは疑い深〜い目をして、先輩の白衣姿をじろじろ眺めている。
「ん……まあ、姉貴がこの研究室にいてな。今度の夏休みは、アイツのお手伝いさ。剣道部も出入り禁止中だし、ちょうどいい機会だ」
「アネキ……姉貴って？　あなた一人っ子でしょう。下手な言い逃れはよしなさい！」
「ウ、ウソじゃないぞ。確かに、七島家の子供はおれ一人だが、腹違いの兄弟……いや、姉妹がいるのだ。葵には話してなかったっけ？」
「聞いてない。誰よ？　その姉って！」
　葵さんは眉間に皺を寄せて、先輩に詰め寄る。
　その時、半開きのドアから白衣を着た女の人が顔を出した。
「蘭、なにやってるの？　早く来て手伝いなさい！」
　だが、彼女はぼくと葵さんに目を止めると「きゃ！」と叫んで固まる。もちろん、こちらも驚いた。
「ハ、ハマちゃん！」
「ハマ先生！」
　なんとそこにいるのは、ぼくの『主治医』である切原浜美センセイではないか。
（えっ、蘭先輩の姉って……）
「こらっ！　急に出て来るなよ」
　先輩がハマちゃんを怖い目でにらむ。
「だって、蘭がいつまでも帰って来ないから」
　首をすくめるハマちゃん。
「切原先生」
　葵さんが目を眇めるようにして、ハマちゃんに話しかける。
「先生は、蘭のお姉さんですか」
「まあ、そういうことね。父親が違うけど」
　観念したように肯定する。
「姉貴！」
「しかたがないじゃない。ばれちゃったものは」

ハマちゃん先生は肩をすくめて、弟……いや、妹に申し訳なさそうな顔をする。
（でも、不倫している訳でなし、異父姉妹だからって、隠すこともないと思うが……）
思案していると、隣の葵さんが半開きになっている白いドアを指差した。
「ところで、ここは先生の研究室ですか」
見ると、ドアには『切原』という札がかけられている。
「ええ、そうよ。ここの医師は部屋がもらえるの。給料は出ないけど、施設は使える。あたしは一応、医学部の所属だからね」
「それって、すごいですね。新米に部屋をくれるなんて」
驚いて思わず口走った。
「ちょっと、シン君。『新米』とはなによ。あたしはこれでも、ちゃんとした外科医なんだからね。手術の成功率は百パーセントなのよ」
「成功率百パーセント？　一回だけでしょう、アンタが手術したのは。それも一番簡単な盲腸」
「こらっ！　主治医に向かって、その口のきき方はなんだ。そんな態度じゃ当分学校には帰れないね。お正月までいてもらおうかしら」
ハマちゃんは片手で前髪を乱暴に掻き上げると「ふん！」と鼻を鳴らした。
「ところで先生、この研究室、中を見せてもらってよろしいでしょうか。せっかく女子大の見学に来ましたので……」
葵さんが部屋のドアを指差しながら言う。
「なんだと、研究室を覗く？　だめだ、だめだ。企業秘密を他人に見せるわけにはいかん」
蘭先輩があわてたように両手を振った。
「蘭に言ってないよ。それとも、あんた、見られて悪いような変な研究、やってるの？」
「なにが変だ。おれは、人類の進化をうながす、すばらしい薬をつくっているんだ」
先輩は両腕を広げ、胸を反らして「なんと偉大な研究であるかことか！」と自分で感嘆していた。
「じゃあ、見せてよ。そのすばらしい研究とやらを」
葵さんは不信感もあらわに、蘭先輩をねめつける。
「だめだ！」

あくまで突っぱねる先輩。
「まあ、まあ、まあ」
見かねたのか、横からハマちゃんが仲裁に入る。
「見せてあげるわ。二人とも中に入って」
「姉貴！　それは」
蘭先輩が鋭い声でハマ姉を制する。
「あら、いいじゃない。別に『研究』というほどのことは、やっていないから」
うながされて中に入った。六畳ほどの簡素な部屋。フローリングの床にスチールの事務机と椅子二脚。窓の近くには、段ボールの箱が雑然と積み重ねてある。
「あたしの部屋は狭いけどね。身分が助手なもんで。松原先生のは、この倍あるわ。なにせ、あの方は学位を持っているから」
そう言って、肩をすくめる。
「学位って、ハマ先生も持ってるよね。大学卒でしょう。一応」
ぼくは不思議に思って聞いた。
「ちょっとシン君。あなたって、いちいち気にさわる言い方をするのね。ここでいう『学位』って、大卒の学士じゃなくて、博士号のことよ。もう！」
駆けだしのハマちゃん先生に、思いっきりにらまれた。

片側の壁には一面、スチールの棚が張りつくように並んでいる。そこには大小のビンがいくつも置かれていた。ぼくはその一つに目をとめた。中には灰色の小さな粒がたくさん詰まっている。それを取り出し、目をすがめて中身を検分するが、よくわからない。
（なにかの種のように見えるが……）
思案していると、いきなりビンを取り上げられた。
「こら！　ジロジロ見るな。もういいだろう。お前ら、出て行ってくれ。じゃまだ！」
蘭先輩がものすごい目をして、ぼくと葵さんをにらむ。
「行きましょう、シン。ここにはガラクタばかりで、人類のためになるようなすばらしい薬なんて、一つもないようよ」
葵さんがぼくの腕を引っ張って、部屋の外に連れ出す。
「姉貴、塩をまいとけ！　二度と入れるんじゃないぞ！」

部屋の中から、蘭先輩の怒鳴る声がした。

暑い日差しを避けて、緑の枝を広げたケヤキの下で涼んでいると、ゴーン、ゴーンと、お寺の鐘をつくような音が聞こえた。音は構内の中央にそびえている五重の塔をかたどった時計台の方から聞こえて来る。十二時を知らせる鐘。ここは仏教の学園だから、キリスト教会のような甲高い音はしない。

「シン、お昼にしましょう」

葵さんはぼくを連れて、学生食堂に向かった。

食堂は図書館の五階部分をフロアごと使っている。ぼくたちは病院でもらった食券を出して、葵さんの好物、讃岐うどんを注文した。

今は夏休みなので学生の姿もまばら。ぼくたちは窓際の眺めのいい場所を選んだ。

「ねえ、葵」

ぼくは、讃岐うどんをツルツルと口に吸い込んでいる葵さんに声をかける。

聖婚以来、彼女の要望で二人だけの時には『さん』付けをやめた。最初は抵抗があったが、慣れたら親近感がわいてとてもいい。

「この大学って、とても広いんだね。学部もいっぱいあるし」

「そうね、文化系、理科系、体育系、まさに女子の総合大学よ」

「葵も、ここに入るんだよね」

「もちろんよ。ここなら、むだな受験勉強しなくていいし。シンは？」

「う〜ん……」

中学時代からの親友、祐（ゆう）や崇（たかし）との約束がある。高校はハプニングのせいで別々になったが、大学は同じところに行こうと誓い合った。だが、いざ女子だけの世界に浸っていると、こういう環境で過ごすのもいいかなと思う。それに今は聖婚して心の伴侶がいることだし。

「来ないの？」

その伴侶が不安そうに顔を傾ける。

「迷っているんだ……」

正直に打ち明ける。
「そうね、決めるのはまだ早いか。でも、わたしとしては同じところに進学してほしい。そうすれば、また一緒に過ごせるから」
葵さんは懇願するようにぼくの顔を見つめていた。

それから、図書館や体育館、各科の研究室などを見てまわった。胸に下げた許可証のおかげで、とがめられることはなかった。今は夏休みだというのに、かなりの学生が出入りしている。もちろん女ばかりで、男の姿は一人も見かけなかった。男子禁制は高尾山麓にある中高と同じだが、皆、個性あふれる自由な服装。そのカラフルなこと。（さすが女子大生）と感心することしきり。
「さあ、もう帰ろうか」
しばらく学内を見てまわったところで、葵さんにうながされた。
「帰ろうって、どこへ？」
（まさか、高尾の家……）
一瞬、喜びかけたが、葵さんの「病院に決まってるでしょう」の言葉で現実に引き戻される。
「あなたは翔鶴院様の介護を引き受けたのだからね、もう手術が始まってる頃よ。もっとも今夜は集中治療室でしょうけど、明日か明後日には病室に帰って来るわ。そうなったら忙しくなるわよ」
「えっ、いそがしいって？　オレは夜、同じ部屋に寝て見守り、時々声をかけてやるだけじゃあ……」
不審に思っていると、彼女は「バカねえ」と憐れむような目を向けて来た。
「認知症のお年寄りが、それだけで済むはずないでしょう。夜中でも騒ぐし、いつ「おしっこ」と言うかわからない。あなたはロクに眠れない。介護される方より、介護する方が先に倒れる。これは命がけの仕事になるよ。たぶん」
「うへ～え」
目の前が暗くなりそうだった。退院したら葵さんと二人、高尾にある彼女の家で夏休みを過ごそうと思っていたのに。
「病み上がりで、いきなりこれじゃ身体が持たないね。わかった、こうしよう。夜だけの介護だから昼間は空いてる。高尾のウチに来て昼寝するといいわ」

その言葉で霧が晴れるように目の前が明るくなった。この部屋は南向き。日中は太陽の光が差し込むし、プロの介護人もいるから、お婆ちゃんは寂しくないだろう。その間、葵さんと楽しい昼寝。高尾まで通うのに、ちょっと時間がかかるが。

3

それから三日後に、翔鶴院さまがベッドごとぼくの部屋に運ばれて来た。やはり葵さんの言った通り「マサコ！　マサコ！」と呼ぶお婆ちゃんの声に、一時間毎に目が覚めた。

「オレ、正子じゃないって！」

何度もそう怒鳴ったが、お婆さんは聞き入れない。おしっこを取るために、しびんを当てると暴れる。「かゆい」と言うから、寝巻を脱がせて背中をさする。それを彼女が寝つくまでやる。

心底くたびれてベッドにもぐり込みウトウトしかけるや、また「マサコ！　マサコ！」の声。朝六時に介護福祉士が来て、翔鶴院様の世話を始めるまでそれが続く。

一人ではどうしようもないと思っていたところ、葵さんが「一緒にいてあげる」と言い出した。

「でもベッドは一つしかないよ」

この部屋に三床入れるのは無理だ。

（それとも二人で添い寝……それ、いいかも）

一瞬、喜びかけたが「どうせ、誰かが寝ずについていなくてはならないのでしょう。なら一つでいいじゃん。交代で使いましょう」と、ぼくにとってはがっかりしたことを言う。

それからは、毎晩二人で介護に務めたので、心身がずいぶん楽になった。それでも不眠になるのはどうしようもなく、昼間は高尾の家で不足分の睡眠を補充する。

それだけではない。高校生である以上、学校の勉強もしなければならないし、入院で衰えた筋肉のトレーニングもやらなければ。それに、秋の文化祭に展示する美術部の作品も描かないと。

やることがあまりに多くて目がまわりそう。だが、いいこともある。パートナーの葵さんが、一日中そばにいるのだ。

朝、プロの介護人が来るや、葵さんと連れ立ってこの病室を出る。
「これ、マサコ、ヨネちゃん、どこいくでぇ～」
『ヨネちゃん』というのは『米子』という葵さんの母親の名前。翔鶴院の檀家で、子供の頃からお寺に出入りしていたので、その当時から住職を務めていたこのお婆ちゃんは、彼女のことをよく知っているのだろう。今では娘の葵さんを『米子』だと勘違いしているようだが。
皺だらけの手を上げて「マサコ！　ヨネコ！」と必死に引きとめる。
ぼくたちは、お婆ちゃんの悲しそうな声に耳をふさぎ、足早に部屋を後にする。病院の食堂で葵さんと二人、軽い朝食をとる。それから病院の送迎バスに便乗して近くの駅に行き、高尾行きの電車に乗る。
葵さんの家に着くや、すぐ布団に倒れ込み爆睡。日が陰り始める頃に目覚めて、いろいろやっていると、すぐ一日が終わる。急いで夕食をかき込み、世田谷に向かう。
そんなある晩のこと、葵さんと二人、翔鶴院様の介護に手を焼いていると、ドアが開いて白衣を着た小柄な人物が入って来た。髪を後ろに束ねて、昔の剣豪のように後ろに流している。
「おおっ、苦労してるなぁ。なんだ、葵も一緒か」
彼（？）はそう言いながら、両手を白衣のポケットに突っ込んで、ぼくたちが翔鶴院様のオシッコを処理しているのを悠然と眺める。
「蘭！」
「蘭先輩！」
同時に声を上げた。
「な、なにしに来たの！」
「なにしに来たんですか！」
同時に問いを発する。
「失礼だな『なにしに来た』はないだろう」
先輩は相変わらず白衣のポケットに両手を入れたまま、部屋の中央まで歩いて来た。そして「コラッ、触るなバカ！あっち行け！」と、聖職者とも思えない罵詈雑言を発している翔鶴院様を見おろす。
「あ～あっ、いかに仏道を究めた徳人でも、脳が崩れちゃ、

お終いだ。ただ生きる肉塊にすぎん」
先輩の揶揄するような言葉に、さすがのぼくもムカッと来た。葵さんも同様だったとみえ「蘭、この方に、なんてこと言うの。出て行って！」とすごい剣幕でにらみつける。
「待て、待て、けなしているのではないぞ。おれも、この方は尊敬している。お袋が大変お世話になったからな。翔鶴院様の力がなければ、姉貴もおれも、ここにはいなかったはずだ。おれが産まれる前、お袋を二人の男……姉貴の父とおれの親父だが、激しく取り合って、殴り合いまでしたそうだ。そこをこの方が丸く収めてくれた。だから、おれはこのお婆ちゃんに、元の聡明なご住職に戻ってもらいたいのだ」
蘭先輩は「話しが長くなったが」と一呼吸おいて、「そこで、おれは頭のよくなる薬を発明した」と、自信たっぷりに宣言した。
そして、白衣のポケットから小さなビンを取り出す。中には黄色いドロドロした液体が入っていた。
「これは認知症の特効薬だ。これを飲むと脳内のニューロンが再生して、脳細胞、特に記憶をつかさどる分野が活性化する。またアルツハイマー型の場合は、脳にたまった悪いタンパク質を取り除き、脳細胞をきれいに浄化する。すると記憶、判断力が鮮明になって、元の人格に戻る」
先輩は『どうだ！』と言うように胸を張った。
「それ、誰がつくったの？」
葵さんが眉間に皺をよせ、疑い深〜ぃ顔をする。
「もちろん、おれだ！」
「なにからつくったの？」
「キノコとか野草とかゴキブリとか」
「ゴキブリ！」
葵さんが悲鳴を上げ、窓際まで飛び退く。
「ゴキブリをバカにしちゃいけないぞ。あれはとても栄養価が高いのだ。調理次第ではエビみたいに美味しい食材になる」
白衣の胸を反らし自信満々の様子で答える。
「現在、我が国には六十五歳以上の老人が三千四百万人もいる。これから、もっと増える。働く人口より多くなるのだ。これらの年寄りがなんの仕事もせず、毎日ぶらぶらしていたら、彼らに支給する年金や医療費の負担で、この国

は破産する。これでは我々に未来はない」
先輩はビンを握りしめたまま、額に憂いの表情をつくる。
まだ高校二年生で、しかも中学生にしか見えない少女が『我が国』とか『この国』とか、評論家のような言葉を使うのには、かなりの違和感を覚えた。
「では、どうすべきか。一番いいのは、年寄りがリタイヤせず、誰の介護も受けず、寿命が来るその日まで、普通に生産活動を続ける。これがベストだ」
「それは無理だわ。確かに寿命が尽きるまで、元気に働いているお年寄りはいるでしょう。でも大部分の人は足腰が弱って歩けなくなる。また認知症になって、人間としての生活ができなくなるわ」
葵さんは「無理、無理！」と首を横に振った。
「なに、老化を防ぐ薬を発明すればいいんだ。生物には老化をうながす遺伝子が存在するという。それを取り除けば人は老いず、事故や病気、戦争や殺人でないかぎり、永遠に死ぬことはない。だが……」
先輩は無念そうに首を振って続ける。
「現在の科学では、その方法はまだ解明されていない。いずれ、このおれが発明することになると思うが、それにはまだ長い年月がかかる。おまえたちが生きているうちに、間に合うかどうか……」
十七歳の少年……いや、少女が天井を仰いで長嘆息（ちょうたんそく）する。
「取りあえず、今はこのクスリをつくった。これで一時的ではあるが、このお婆ちゃんも正常な頭になるだろう」
先輩は「見ていろ」とビンの栓を抜き、失禁して虚脱状態になっている翔鶴院様に近づいた。
「蘭！　なにするの？」
葵さんが窓際からすっ飛んで来て、先輩の背中に組みつく。
「コラ、葵、じゃまするな。離せ！　クスリを飲ませられないじゃないか」
「毒かなにかわからない変なモノを、飲ませるのはやめなさい！　死んじゃったらどうするのよ」
（毒！）
ぼくの脳裏に『ロスト・ケア』という言葉が浮かんだ。
葉真中顕（はまなかあき）の書いた小説で、介護殺人を扱ったものだ。老

人ケアセンターの介護士が、寝たきりになった認知症の老人を『救い』だと称して、次々に薬殺していくストーリー。先週、葵さんが持って来てくれた光文社の文庫本。一気に読み終えたが、ぼくはどうしようもない、深い奈落に落ちて行くような感触を覚えた。

一生を懸命に働いた者が、老いて半身不随になり、しかも認知症になって、社会に役に立たないどころか、家族やまわりに非常な負担をかける。そのような老人を、どう扱えばいいのか。昔の貧しい山村では山に捨てたと聞くが、人権第一主義の現代では、処置による安楽死が認められるはずはない。

「やめて下さい、先輩！」

葵さんに加勢して蘭先輩を止めに入る。

三人で揉み合っていると、いきなり「うわおおおっ！」と猛獣のような声が響いた。見ると、翔鶴院様が大きく目を開き顔に恐怖の表情を浮かべている。

「お婆ちゃん！」

「翔鶴院様！」

「婆さんどうした？」

三人の声が重なる。『婆さんどうした』はもちろん蘭先輩の声。

「お、オニじゃあ！　オニじゃあ！　く、来るなぁ――っ」

翔鶴院様はぼくたちを指差して「オニ！　オニ！」と叫び続ける。

逃げようとしているのか、片手を「あっち行け、しっ！しっ！」と振りながら起き上がろうとするが、腰の骨が折れているので、どうしようもない。

ぼくは最初、ビンを持って近づく蘭先輩を鬼と間違えたのだろうと思い「お婆ちゃん、おれ正子だよ。大丈夫、この人、小鬼みたいだけど、一応、人間だからね」と言いながら、骨と皮に痩せ細った手を取ろうとしたが「近寄るな、オニ！」とはじき返された。どうやらぼくら三人を、人を喰う鬼と見間違えているようだ。

途方に暮れていると、蘭先輩がお婆ちゃんの懐にスッと飛び込み、片手を頭の後ろにまわして顔を上げさせるや、クスリ（？）の入ったビンを口の中に突き入れ、中の液体をすばやくノドの奥に注ぎ込む。そして、肺に入らないようにか、片手でノドを擦りながらゴクゴクと飲み込ませて

しまった。
まさに『あっ！』と言う間の出来事で、止める暇もなかった。クスリ（？）を飲まされた翔鶴院様も、なにをされたかわからないという顔をしていた。
これは剣術の動きか、すばやい蘭先輩。さすが示現流二段。
「蘭！」
感心していると、横から葵さんの怒鳴り声がした。
「蘭、なんてことするの。早く吐き出させなさい！」
でも先輩は経過を見ているのか、翔鶴院様の肩を両手で抱いたまま、じっとその顔を見つめている。
「シン！　早くナースセンターへ。警察を呼ぶの、ケーサツ！」
今度はぼくに向かって怒鳴る。
「騒ぐな！」
蘭先輩が制する。
「ほら」
蘭先輩が肩から手を離すと、お婆ちゃんはゆっくり布団の上に倒れ込む。そして見開いていた目を閉じる。
「死んだ！　翔鶴院様が死んだ！　蘭が殺した！」
葵さんは髪を振り乱し「ケーサツ！　ケーサツ！」と叫ぶことしきり。
「バカ、誰が死ぬか。よく見ろ！」
蘭先輩の言葉に、お婆ちゃんの様子を注視すると、確かに目を閉じているが、その顔はおだやかで頬に赤みが差している。心臓に耳をつけると〈ドクン、ドクン〉と規則的な音。
「生きてる。お婆ちゃん、生きてる！」
ぼくは狂乱状態にある葵さんの腕を取って、ベッドの縁に引き寄せた。それでも、まだ彼女は「蘭が！　蘭が！」とわめいている。
そうやって騒いでいると、ベッドから「うるさいのう」という声がした。皆、一斉にそちらを向く。
ベッドの上には、両肘でわずかに上半身を起こしかけた、翔鶴院様がこちらを見ていた。その目は今までと違って、生き生きとぼくらをとらえている。
「翔鶴院様！」

「お婆ちゃん！」
ぼくと葵さんは枕元にすっ飛んで、翔鶴院様の肩を支える。
「おや、アオイちゃんに、シンちゃんじゃないかえ。二人とも、そげん騒いで、どげんしたとね？」
キョトンとした目でまわりを見まわしながら、ぼくと葵さんの名前を正確に呼んだ。さらに後ろで空の小ビンを握りしめている蘭先輩に目を移し「おおっ、ハクシも一緒かえ」とにこやかな笑みを浮かべる。
『ハクシ』と呼ばれた蘭先輩はビンを白衣のポケットに仕舞うと、ぼくらを押しのけて翔鶴院様のそばに寄り「どうだい婆さん。すっきりしたか」と、片手を伸ばして彼女の白髪頭をなでる。
この態度に葵さんが激怒。「蘭、言葉をつつしみなさい！この方は、いやしくも……」と言いかけたのを、お婆ちゃんが「ええ、ええ」と、さえぎる。
「ランちゃんは特別じゃ、なにせこの子は将来、じんるいを救う偉い博士になるんじゃけん。のうべる賞とかも二つや三つは、もらえるじゃろうからのう」
肩まで白髪におおわれた翔鶴院様は、わけのわからないことを口走りながら、うれしそうに頭をなでられていた。
先輩はしばらくそうやっていたが、おもむろにぼくらの方を向くと、白衣のポケットに両手を突っ込み、教授かなにかのように胸を反らす。そして、自信満々の様子で宣言した。
「いいか、諸君、よく聞きたまえ。ケアとは、日常の生活ができなくなった者を、車椅子に乗せたり、おむつを替えたりしてやることだけではない。そうなった原因を取り除いて、元の自立した人間に戻す。それが真の介護、ベスト・ケアだ！」
蘭先輩のつくった怪しげなクスリの効果があったのか、その後も翔鶴院様は呆けることなく、手術でつないだ腰の骨もずいぶんよくなって、八月の終わりには退院する運びとなった。後は学園内のクリニック（医務室）で、松原先生やハマちゃん外科医のリハビリを受けるだけでよかろう、ということになった。

4

もうすぐ二学期が始まる。ぼくと葵さんは、一旦、高尾の家に帰り、そこで三日ほど過ごした。二人だけでショッピングや小旅行を楽しむ余裕はなく、まったく手をつけていない夏休みの宿題に取り組まなければならなかった。だが、それも休み明けの前日になんとか形だけはつけた。

そして明日が始業式という日の午後、ぼくたちはセーラー服に着替え、デイパックを背負って、高尾山麓に向かった。

「あっ、忘れてた！　幽霊屋敷」

夏休みには葵さんと、学園の構内から見える古い西洋館を探索して、夜な夜な現れるというオバケの正体を突き止める予定だったのだ。

「幽霊屋敷？」

学園の正門を前にしながら、葵さんがいぶかしげな表情をつくる。

そこでルームメイトのお雪から毎晩のように聞かされた、学園の外に建っている崩れかけた館に出て来る幽霊（都市伝説だと思うが）の話しをした。夏休みに葵さんと二人で、その西洋館を調べるつもりだったと。

「閉門まで、まだ二時間はあるね」

葵さんは腕時計を見ながら（どうしようかなあ～）というふうに首をかしげる。

「行ってみましょう」

この門をくぐってしまったら、校外に出るには学校当局の許可がいるので、なかなか面倒だ。

「そうねえ……幽霊屋敷ねえ……」

気乗りしない様子。でもその顔には、かなりの好奇心が浮かんでいるようにも見える。

「行きましょう、さあ！」

葵さんの腕をつかんで、半ば強引に館のある方へ引っ張る。彼女も腕を引かれて（なんとはなしに）といった様子でついて来る。

門に入らず、横道にそれる二人を、詰所の警備員が不審そうに見ていた。

塀の外側には整備に当たっている作業員が通るのだろ

う、小型自動車がやっと通れるくらいの砂利道が続いている。その道を、葵さんの手を引きながらしばらく歩く。すると、それらしき赤レンガの西洋館が見えた。
　想像していた通り、本館は三階建て。横に長く、写真なんかで見た中世の貴族館を小型にしたような感じだ。本館の西端に五階建ての丸い塔がついている。館も塔も緑のツタが天井までからみつき、窓は壊れて、ぶきみな四辺形の黒い穴を覗かせている。
　館は広い庭を含めて、人の背丈ほどのレンガ塀に囲まれている。塀の上端には鉄の忍び返しが埋められ、外部からの侵入を厳しく拒絶している。
　レンガ塀に沿って歩いて行くと、正門らしき所があった。だが、ここもサビの浮き出た重々しい青銅の扉にさえぎられ、中に入ることができない。扉には頑丈な南京錠がかけられており、押しても引いてもビクともしない。
「どこか崩れている所があるはずよ。探してみましょう」
　葵さんはそう言って先に立ち、ツタの絡まるレンガ塀に沿って歩く。なんだか興味津々といった様子。先ほどの気乗りしない態度がウソのようだ。
　塀に沿って、人ひとりがどうにか歩けるくらいの道がついている。そこをたどって行くと、葵さんの予想通り、塀がV字型に割れた箇所があった。そこに首を突っ込んで、屋敷の中を覗く。
（なんと荒れはてた庭……）
　昔はさぞ豪華だったと思われる西洋庭園。今では胸まで届くような雑草が一面に生い茂り、伸び放題の木々は妖怪のごとく枝をくねらせている。
「入ってみよう」
　葵さんは背負っていたデイパックを草の上に置くと、割れた塀に手をかけ、スカートの裾をひるがえしながら軽々と乗り越える。
「ま、待って！」
　ぼくはあわてて止めに入る。
「ここは他人の家でしょう。不法侵入とかに、ならないかなあ」
「不法侵入？」
　葵さんは「ふふん」と笑って、荒れた庭や建物を指差す。
「そりゃあ、誰かの所有物でしょうよ。でもその誰かさん

が、ここを掃除に来てるとは、とても思えないわね。管理義務を放棄しているのだから、入っていいの」
葵さんはこじつけるように言って、草の中を泳ぐように館の方に向かう。ぼくも急いで塀の割れ目から『侵入』し、彼女の後を追う。
セイタカアワダチソウというのか、やたらに丈高く、木のように硬い茎を掻き分けながら歩くこと数分。ようやく館の外壁に行き当たった。
古いレンガ壁を伝いながら行くことまた数分。ようやく玄関口にたどり着く。だがここにも青銅の重厚な扉が立ちはだかっていた。力を入れてノブをつかみ、押したり引いたりしたが、一ミリたりとも開かない。
「人が出入りしている形跡は、まったくないね」
葵さんの言葉に玄関のまわりに目をやる。そこにはレンガの屑や腐りかけた落ち葉、枯れた木の枝などが散乱し、人の足跡らしきものは見られない。
「建物を一周してみよう」
彼女は玄関から一段低い庭に下りる。
「お雪ちゃんの話しが本当なら、どこかに入口があるはずよ。相手が幽霊でもない限り」
ぼくらは壁際にたまった腐葉土を踏みしめながら、館の入り口を探す。ところが行けども、行けども、それらしきものは見つからなかった。
確かに裏口はいくつかあったが、どれも青銅のドアがついており、ノブをまわしても玄関同様に開かない。窓から入ろうにも、そこには頑丈な鉄格子がついていた。それは一階だけでなく三階の窓までつけてある。それ以上の階、すなわち夜な夜な明かりが灯るという塔の四、五階にはなかったが、とてもそこまで登れるものではない。結局、館に入るのは諦めざるを得なかった。
（それにしてもまあ、なんと豪勢なこと……）
一階の窓から中を覗くと、そこは三階まで吹き抜けになっており、各階の踊り場には紋様の入った木製の手すりがついている。だが、今は変形して反り返り、中には崩れて垂れ下がっているものもある。
（この場所に、いつか来た覚えがある……あの時は、もっと賑やかだったような……）
デジャブというのか、とてもなつかしい思いが心の中に

わき上がって来た。
　ほこりの積もった室内には重々しい木製のテーブルや、革張りの椅子が置いてあり、往時の勢いがしのばれる。それも、今では茶色に変色し、さぞ高価だったろうソファーの革はカサカサに乾き、はがれて行くのを待つまでになっている。
「人の住んでない家って、みんなこうなるのよね」
　葵さんは感極まるように、広い室内を見まわしている。
「やっぱり、誰もいないようね」
　建物のまわりを一周したが、室内にはほこりが溜まり、いくつかあるドアの前にも落ち葉が積み重なって、人の足跡などどこにもついてない。
　夜な夜な怪しげな灯りが見えるという尖塔の窓も、今は暗く、動く者の影さえ見えない。
「もうすぐ学校の門が閉まるわ。行きましょう」
　葵さんにうながされ、廃屋を後にした。まだ真夏とはいえ、もう八月の終わり。たそがれ時の靄があたり一面に忍び寄っている。雑草の吹き出た小道を、校門の方に歩きながら、後ろの西洋館を振り返る。
　靄の上に、ツタの絡みついた丸い塔が浮いている。その二つ並んだ黒い窓が、あたかも魔人のようにぼくらを見おろしていた。
「ねえ、一度、夜中にあの塔を見に行きませんか。学園の中からでも、木に登ればよく見えますよ」
　隣を歩く葵さんに話しかける。
「そうねぇ……」
　拒否されるかと思ったが「あなたが、どうしてもと言うのなら」とすんなり同意してくれた。
（よし！）
　この人と一緒なら百人力だ。あれは、単なるお雪の作り話とは思えない。
　あの館には、確かに人が出入りしているのだろう。館の庭に人の足跡はなかったが、どこかに必ず、出入り口があるはずだ。病気のせいで予定がひと月遅れたが、今度こそつきとめてやる。

（第二話・了　第三話に続く）

筒香嘉智と畑岡奈紗

畑中康郎

筒合嘉智はプロ野球、横浜ＤｅＮＡベイスターズの不動の四番バッターだ。まだ二十四歳という若さで、すでにチームの大黒柱である。彼が怪我などで戦列を離れたなら、戦力は半減する。

その筒合、平成二十八年七月二十二日現在、打率三割二分八厘（リーグ二位）、ホームラン二十八本（リーグ二位）、打点六十六（リーグ三位）という成績だ。打率は本来がアベレージヒッターではないから、出来過ぎだとしてもホームランで現在一位のヤクルトスワローズ山田哲人の二十九本はすぐにでも上回るだろう。打点はホームランが大きく寄与するから、これも一位に躍り出ることは遠い先ではない。

驚くことは、七月前まではわずか十六本だったホームランが、七月に入って二十八本と急増していることだ。それもここ三試合連続で一試合二本という離れ業を演じている。ホームランは狙って打てるものではなく、よほど体調が万全で、球がよく見えていなければ打てるものではない。投手は打ちやすい甘い球を投げないよう努力している。しかし、それでも打席で粘っているとたまに比較的打ちやすい

球が来る。それを打ち損じることなく確実にホームランにするためにはよほどの集中力が必要だろう。野球好きな私の記憶では、三試合連続二本のホームランという記録は過去にない。あのホームランバッターの王や野村でさえも打ったことがなかった。しかも凄いことは、その三試合の中で、どうしても点が欲しい場面でホームランを狙いにいって実際に打てたことだ。二本打った試合の一試合目は、ヤクルト戦のことだ。八回の裏に二点を取られ八対八の同点に追いつかれた九回表、どうしても点の欲しい場面で、ホームランを狙いに行った。そして狙い通りに打った。これは本人が後に言っている言葉だから事実だろう。

さらに昨晩の巨人戦、延長十二回表を終わって二対二のイーブン。その裏にＤｅＮＡが無得点ならば引き分けになってしまう。どうしても点が欲しいこの場面で、筒合はホームランを狙いに行った。巨人の投手は山口鉄也だ。山口はフルカウントになって、やや甘い球を投げた。スライダーだったが、筒合はこれを打ち損じた。しまった、という表情が彼に現れた。おそらく、ストレートを待っていたために少しタイミングがズレたのだと思う。こうなると、次はなかなか甘い球は来ない。打ち取られる公算が大きいと私は思った。ところが、次の球、球種はその待っていたストレートだった。外角にスーっと入ってきた。今度は物の見事にフルスウィングすると打球はライナーとなってライトスタンドに突き刺さった。三対二のサヨナラゲームであった。チームメートが歓喜して出迎える。これでチームは三連勝。チームが勢いづく勝ち方になった。

私が感動したのは、その後のヒーローインタビューである。インタビューにおいて、私を含む多くの普通の人間は、自分自身に感動してしまって舞い上がってしまうだろう。そしてつい謙虚さを失って自分の打撃センスを誇るに違いない。ところが、彼は冷静で少しも舞い上がっていなかった。淡々と、そのときのシーンを回想してこう言った。

「強く打って塁に出られれば、次の打者がロペスだから彼が何とかしてくれるだろう」

つまり自分の凄さを少しも前に出さなかったのだ。そして次にホームランの量産を聞かれると「そんなことよりチームが勝つことが優先です」と言った。建前と本音があって、腹の中はわからない。しかし少なくとも彼の態度や言

葉に驕ったものが、（甘い見方かもしれないが）私には感じられなかった。

人間、驕った瞬間から運気は下がり始め、気が付くと以前の打撃に戻ってしまうどころか、ダメ選手に成り下がるケースが多い。何故そうなるか？　驕れば冷静さと集中力を欠くからである。当然、努力を続ける気持ちも希薄になる。天才もその能力を発揮できるのは、不断の努力があってこその結果なのである。だから、絶対に驕ってはならない。逆に言うと、人間は絶好調のときに誰しも驕りたい気持ちになるが、その気持ちを抑え自分との闘いに勝てた人が一流になる。スポーツでも仕事でも、常に冷静で足元を見据え、不断の努力を怠りなく続けること。これが人生に成功する（有意義に過ごす）秘訣と言っていいのではないだろうか。他人に勝つことではなく、自分に勝つことである。（しかしこれがなかなか難しい）

二十四歳の若い筒合選手も、今は絶好調であってもずっとこのまま順調であるはずはない。当然、壁にぶつかり極端なスランプに陥ることも考えられる。人生は波、上昇下降の繰り返しである。問題はうまく行かなくなったときでも、自分の気持ちをコントロールできるかどうかであろう。

以上は、平成二十八年七月二十三日に記述したものだ。

その後、十月一日にプロ野球セントラルリーグの全日程が終了し、球団および個人の全成績が決まった。それによれば優勝は広島東洋カープ、二位読売ジャイアンツ、三位横浜ＤｅＮＡベイスターズであり、ここまでがクライマックスシリーズに進出する。個人では打者部門について書くと、首位打者は坂本（巨人）で打率三割四分四厘、本塁打王は筒合で四十四本、打点王も筒合が獲得し、成績は百十打点であった。

つまり、筒合は七月以降も打撃好調を維持し、言い換えると謙虚に努力を続けて、この結果に到達した。素晴らしいことだった。

そして、十月二日にはもっと驚くような出来事があった。日本女子オープンゴルフでのことだ。私は前日まで十五歳のアマチュア選手、長野未祈が三日間のトータルでトップに立っているとのニュースを知り、ゴルフに普段興味がな

いにも関わらず珍しくテレビ観戦をした。長野には頑張ってほしいと思う反面、緊張感でスコアーを落とすだろうとも予測した。

結局、予測は外れなかった。徐々に順位を後退させ、代わりに出てきたのが、畑岡奈紗（因みに両親がＮＡＳＡから命名）という同じくアマチュアの十七歳の選手だった。彼女は中島常幸プロの主宰するクラブで練習していたらしいが、もともと才能があったのだろう。見事に並み居るプロを尻目にフォーアンダーで史上初めてアマチュア優勝となった。十八番でバーディーを奪い、それまでトップだった堀琴音と並んだ。畑岡の後のグループだった堀は十七番でボギーを叩き、スリーアンダーに後退。そのまま畑岡の優勝となった。これは凄いことである。

さて問題はこれからだ。普通の選手はこの夢のような快挙に舞い上がり自分を見失うものだ。そして自分が得た栄光に自身が押し潰され、消えて行く。マイナス思考といわれそうだが、そんな危険性がないとはいえない。実際、そういう選手は多い。例えば、男子マラソンで活躍した重松森雄は、まだ無名の一九六五年、前年にエチオピアのアベベ・ビキラが東京オリンピックで出した二時間十二分十一秒二という当時の世界最高記録を破る二時間十二分ジャストという記録を作って優勝した。恐らく想定外の番狂わせ、フロックだったに違いない。その後優勝したことはあったが、メジャーな大会ではなく、しかも二度と世界最高を更新することは出来なかった。最高記録を出したとき、まだ二十五歳だったからまだいくらでもその可能性はあった。しかし、あまりにも凄い記録を出してしまったために世間から多大な注目を浴び、マスコミにも引っ張り出され、それが重圧になり実力を出し切れなかったのではないか？あるいは、どこかに慢心はなかったか？　そのどちらかだろう、と私は推測する。

だから、畑岡選手に望みたい。自らの生み出した栄光に捉われ、振り回されてはならない。そのためには、自分を冷静に見直してみることだ。ひょっとしたら、様々な幸運が重なって取れるはずのない優勝を間違って取ってしまった。だから、これは自分の実力ではないと考える方がいい。自分の実力で当然に取れたものと驕った瞬間に転落がやってくる。謙虚に自分の足元を見続けることだ。

しかし、彼女は精神的に未熟な十代の少女だ。したがって、彼女自身の努力だけでなく、周囲の的確な指導が求められる。人間は決して驕ってはならない存在なのだが、地道に努力を続けることは意外と難しい。そのことをきちんと教え諭すことが肝要だろう。

（了）

【トピック】

印西市民文化祭に「草の丘」を出展

市制施行二十周年記念事業の一環として第二十一回印西市民文化祭が十一月に開催されましたが、その展示部門に文芸「草の丘」を出展しました。

日時は、平成二八年十一月八日（火）～十三日（日）、会場は中央駅北側にあるイオンモール３階のホールです。

文芸「草の丘」の出展内容は、下段の写真のようにポスターと第九号、第一〇号の冊子。テーブルの上には、インターネットのホームページを検索できる「チラシ」も設置しました。

「草の丘」の展示

会場には、彫刻・陶芸作品・写真や書に加え短歌・俳句などが展示されましたが、小説・随筆、詩などを掲載する文芸誌はユニークで、注目を集めました。

冊子を手に取って、頁を繰る人が多く見受けられましたが、入会の問い合わせや感想などを寄せてくれる方は一人もおらず、少々寂しい結果……でした。

モミジのごとく

香取　淳

傾斜して曲がりくねったニュータウン大橋、その歩道を高みまで登ると前方に視界が開ける。橋を渡った先は緩やかな下りで、銀杏並木が黄金色に煌めいていた。とりわけ花の丘公園に面した左手が色濃く染まり、中には枯葉を散らし始めた樹木もある。坂下の交差点を渡り、公園に足を踏み入れる。左手にホールや事務所がある建物の平たい屋根が続き、右側の低地に楔（くさび）形の大きな池。その池に沿って、私は小径をゆっくり下って行く。水面の先は深緑の杉を背景に、楢は黄色に、背の低い楓は赤い塊になっていた。しばらく水辺を左に進み、楔の先端で池沿いに鋭く折れ曲がる。そこから小径は水辺を離れて、眼の前に広大な芝生とそれを取り巻く木立が広がった。半分枯れかけた芝生の遥か前方に数本の赤い木立、楓かそれに類した樹木と思われる紅葉が互にその鮮やかさを競っていた。

私は重いリュックを背負い直し、赤や黄色に彩られた公園をぐるりと見回した。

――この見事な色彩は、一体何処からくるのか？

その答えは簡単で、銀杏や楓の本来の色、それまでは濃い

緑に覆い隠されていた葉の色なのである。その証拠に芽吹いたばかりの楓の葉は、くすんだ紅色をしている。その若葉に葉緑素が宿って、光と水と炭酸ガスを取り込み、糖質を作り出す。デンプンや繊維などの高エネルギー物質を造り出すのである。誰もが中学か高校で習う生物の知識であるが、そのエネルギー産生の源とも言える葉緑素が、本来の葉の色を包み隠していたためである。

ここまで考えたとき、私の脳裏に何かが閃いた。それは、私自身の半生とどこかが似ている。自分を抑え、押し殺すことが多かった己の生きざまと妙に重なり合う。緑一色に染まった葉は、フルタイムで働いていたときの自分自身。仕事が第一、会社が大事と仕事に打ち込んできた姿に似ている。そして、赤や黄に染まったモミジは、定年後の、自分自身に立ち返ったときの己の姿である。

そう思うと、私は眼の前のモミジに今までにない親しみを感じて、しばらく芝生の真ん中に立ち尽くしていた。

――春から夏、そして秋口へと働き詰めであったモミジたち、陽光にきらめくその姿を誇らしく誇示するがいい。これまでは緑に身を染めて、ひたすらデンプンなどを造り出してきた。しかし、その作業はもうお仕舞い。懸命に取り込んできた陽の光を、今は存分に跳ね返して自分の色に思い切り輝くがいい……。

そんな思いに駆られながら、私はモミジに取り囲まれてしばらく時を過ごした。しかし、芝生の先に立ち並ぶ木々の中には、既に葉を落としたものもある。公園の入口近くに立ち並ぶ桜の若木は、もう既に灰色の幹や枝だけ。そして眼前の鮮やかなモミジたちも、すぐに葉を散らして土に還っていく。そのときまでの時間はきわめて短く、否応なしにやってくる。

モミジに同化していた私の思いは次に来る落葉、人であれば終焉のときに及んできた。

人が死ぬこととなればモミジを愛でているほど暢気な話ではなくなる。たちまち恐怖や不安、苦しみといった忌まわしい思いが押し寄せてきた。しかし、何処かがおかしい。人が生まれ、成長して目いっぱい働き、やがて年老いてリタイア、そして老後という時期を過ごして死に至る。春に芽吹いた若葉が緑を濃くして、デンプンなどをいっぱい造り出し、やがて色づき散っていく。この二つの事柄は動物と植物の違いはあっても自然の摂理としてほぼ同じこと。単なる自然の

営みに過ぎないのではないか……。
そう思うと、私は、いたずらに死を忌み嫌うのはもう止めようと心に誓った。

☆

私が、人の死に直面したのは二十二歳の春のことである。「チチキトク スグカエレ」という電報を受け取ったのは、大学を卒業したばかりの五月の末のこと。入社して日の浅い製薬会社で、新入社員教育を受けているさなかであった。独身寮に届いた急報をにわかには信じられずに、私は郷里の兄に電話を掛ける。そして、「冗談でしょう、嘘でしょう!」としばらくは事実を受け容れることができなかった。しかし、父はその日の午前十時頃に脳出血で倒れ、その後も意識がないという。私は、翌朝、地下鉄で新大阪駅に向かい、開業して間もない新幹線に飛び乗った。
信州の生家には兄弟姉妹が集まっていた。その数は十一人、戦前の「産めよ、増やせよ」の時代であったからさほど珍しいことではなかったが、それでも布団に横たわった父を取り囲む兄弟姉妹の数は多かった。枕元で代わり代わりに声を掛けたり、乾いた唇を綿で濡らしたりしてはみたものの、父の反応はまったくない。そうこうするうちに一夜が明けた。
私は、「大切な入社教育を休んではいられない」という思いに駆られ、大阪に向かう。意識のない父の傍にいても何もできない……、という無力感も手伝っていた。しかし、独身寮に辿りついた私に、いよいよ臨終が近いという報せが届き、翌朝、再び新幹線に飛び乗った。
生家に着いたのは、午後の三時過ぎ。その一時間ほど後に、隣町から医師が往診にやってきた。私が薬学の出身で、製薬会社に入ったことを聞きつけると、「もう幾らも持たないが、強心剤を打ちましょうか」と問い掛けてくる。私は、病気について何の知識もなかったが、黙って医師に頷いた。往診鞄から注射器を取り出し、薬液のアンプルをカットしながら、医師は私に言葉を重ねた。
「君は、薬学を学んできたようだから言うんだが、お父さんの死亡時刻を正確に押さえておいてくれないか。そして、後で私に電話で連絡してくれんかね」
小声で言う医師に「ハイ」と返事をして、私はそそくさと

立ち去る医師の後ろ姿を、兄や姉と共に見送った。
父が逝ったのは、その夜の午後十一時三十五分。五月も残り少ない深夜のことであった。激しくなったり弱まったりしていた息遣いが完全に止まった。私は、それを確かめると、柱時計を見上げ、医師に伝えるべく、針の位置を脳裏にしっかり焼き付けた。
兄が伸びてしまった父の髭を剃ったり、死化粧を施したりして、奥座敷に安置した。それらが済むと、兄弟姉妹は疲れ切って寝息を立て始める。私は何時までも寝付かれずに、布団をそっと抜け出した。そして奥座敷の父の亡骸（なきがら）に添い寝をしながら、顔の白布を取り払った。倒れてから四日後に死亡した父は健康なときと変わらないほど健やかで、顔は艶やかでさえあった。その父の額を撫でながら「大変だったね、もう安心してお袋のところにいっていいよ。一番下の私が一人前になったんだから、もう何も心配は要らない……」と何度も何度も語り掛ける。
六十四歳で昇天した父は、若くして二度も妻に先立たれた。最初の妻は女児と男児を二人残して夭折、その後に私の母が嫁いで九人の子を生んでいる。その二番目の妻も、私が三歳になった春に虫垂炎をこじらせて命を落とした。そのとき、父はまだ四十の半ばであったが、もう二度と妻は持たない、再婚はしないと心に誓った。そして、異母兄弟を別け隔てなく育てるために二人の妻の写真をすべて焼き捨てたという。男やもめの生活は一人でも大義なのに、十一人もの子を男手ひとつで育てるのは大変なことである。もちろん、年長の姉や長男の嫁の手を借りることはできたであろう。しかし、貧しい一家の生計を立てながらの子育て、それは心身ともに想像を絶する苦難があったに違いない。
その父が、いま隣りで静かに眠っている、気持ちよさそうに、そして安らかに。その亡骸から、とてつもなく重い仕事をやり遂げ、ホッとした安堵感が伝わってくる。そのようなことを思いながら、私は明け方まで絶命した父に寄り添っていた。

☆

それは三四歳の秋、私が仙台に住んでいたときのことであ

る。娘の二度目の誕生日を祝って、八木山の動物園やその隣の遊園地で一日を過ごした後に、近くにある妻の実家に立ち寄ることにした。その家には、年取った義母とその長男が二人だけで暮らしている。八木山から坂道を降り、旧道を走って長い橋を渡った。いつもの場所に車を停めて、私が息子の手を、妻が娘の手を引いて玄関に近づいた。すると、縁側に義母が這いつくばっている。妻が駆け寄り、抱き上げようとしたが思うに任せない。頭が痛い！　体が思うように動かないと訴えているようだ。近くに少量の吐瀉物も見受けられた。急いで妻が座敷に布団を敷き、私と二人で義母を抱えて上向きに寝かせる。その作業を進めながら、私は考えた。

――これは脳卒中に違いない。とすると、国立病院の脳卒中センターか……。

妻が、どうしたらよいかと訊ねてくる。その妻を制し、私は居間の受話器を取り上げた。幸いなことに顔見知りの脳外科医、中村先生が電話に出た。義母の状態を掻い摘んで話すと、すぐに救急車で連れて来いという。受話器を一旦置いて、１１９番をダイアル。数分後に義母は救急車に運び込まれ、脇に妻が付き添う。私は四歳と二歳の子供を車に乗せて、救急車の後を追った。

義母の病名は、『小脳出血』であった。出血した部位と出血量などの診断がつくと、即座に緊急手術で血腫（血の塊）が取り除かれた。手術直後に血圧や呼吸が不安定な時期もあったが、順調に恢復。十日後に義母は、歩いて退院することが出来た。

しかし、季節は冬も間近い十一月のことである。脳出血のおもな原因は高血圧で、寒い家では血圧の管理が難しい。ところが妻の実家は木造の古い造りで、暖房がほとんど利かない。そのうえ風呂場は外にあり、一旦家から出なければ入浴もできない。しかも、母一人に息子一人では、昼間に義母の世話をする者は誰もいなかった。そこで、私は妻と話し合い、当分のあいだ、我が家で義母を預かることにした。その間に、古びた実家の改築を進めて、義母が安心して療養できる住環境を整えるようにと義兄に申し入れた。

その頃の我が家は狭かった。２ＤＫの公団住宅の六畳間を義母の専用にして、もう一つの六畳間に夫婦と子供の四人が寝起きすることになった。不自由ではあったが、非常事態だから……と私は我慢するしかなかった。しかし、私より先に

音を上げたのは義母であった。「こんなコンクリートの狭い部屋では息が詰まる」、「もう我慢できない、耐えられない」と不満は日を追って募るばかり。仕舞いには「こんな所に居るくらいなら、死んだ方がましだ！」とまで言い出した。

考えてみれば、義母には脳出血の後遺症は何一つなかった。退院して日が経つにつれて体力も戻ってきている。狭い六畳間で「一日中じっとしていろ」と言う方が無理無茶なことかも知れなかった。そのように感じた私たちは、次の休日に、改築が始まったばかりの義母の家に彼女を送っていった。

それからしばらくは平穏な日々が続いた。しかし、二年後の秋に義母は再び倒れ、初回と同じ脳卒中センターに搬送された。そのとき、私は出張で仙台を離れていたので仔細は知らない。一緒に暮らしていた義兄が救急車の手配や入院の手続きをしたようである。しかし、初回と違って二度目のときは、すべてが裏目に出た。義母に下された診断はクモ膜下出血で、手術は出来ないという。意識も朦朧としたままで、日が経っても快方には向かわなかった。

二週間ほど過ぎたとき、私は脳卒中センターから呼び出しを受けた。約束した時間に医局に入ると、主治医の中村先生が待っていた。そして、「言いにくいことだが、お母さんの退院先を探して」と切り出した。義母は手術ができないし、いまは肺炎を併発していて、強力な抗生剤を投与しても治らないのだという。

「君は顔が広いから、お母さんを引き受けてくれる施設を自力で探せるでしょう。ここには急患が押し寄せてくるから、やることが無くなった患者さんを、いつまでもおく訳にはいかないんだよ」

「分かりました、中村先生。転院先が決まりましたらすぐに連絡します」と即座に答え、私は医局を後にした。

主治医には平静を装っていたものの、突然のことで困り果てた。理屈ではよく分かっているが、我が身に降りかかってくると病院探しは大変なことである。仕事で出入りしている先は、大半が急性期の診療をする病医院で、脳卒中後や慢性期の患者を受入れる施設には殆ど出入りしたことがない。それでも資料を漁って、私は転院が可能な先を絞り込んだ。しかし、それらの施設に足を運んで、義母の入院を頼む気にはなれなかった。二年前の苦い思い出、「こんな所にいるくらいなら死んだ方がましだ！」という義母の叫びが脳裏に焼き

付いているのである。
私は妻と相談して、療養施設に義母を入院させることを止めた。そして、義母が高血圧の治療で通っていた小川医院を訪ね、院長に思いを伝える。院長の小川先生は、私の申し出を快く引き受けてくれた後で、静かに言った。
「うちにもね、お母さんのような患者さんが何人も入院しているよ。よかったら見ていきなさい」
そう言って、院長は傍にいた年配のナースに耳打ちをした。そのナースに導かれ、私は小川医院の二階に上がった。そこは見通しの良い病室で、十数台のベッドが並んでいる。明るい窓際に数人の患者がいたものの大半は空いていた。その空きベッドの奥隅に案内されて、私は驚いた。ベッドに萎縮した患者、身長は小学校の二、三年生くらい、全身がピンク色のキューピーに似た、男女の区別も定かではない患者が転がっている。その人間とは思えない患者は、一本の細いチューブでベッドの脇の点滴の瓶に繋がれていた。
「この患者さんは一五年、このベッドで一五年も寝たままなのよ」
ナースの言葉に、息をのんだ。ただただ、ここに義母を連れて来たくはない、入院は絶対にさせまい、という思いが強まるばかりであった。
小川院長の了解を得て、私は脳卒中センターから義母を引き取ることにした。約束の時間に国立病院の救急車が小川医院の玄関に到着した。年配のナースが、若いナースと共に用意したストレッチャーに意識のない義母を移し替える。小川院長も診察室から出てきて、患者の受入れを確認する。
病院の救急車が視界から消えると、ナースたちは義母のストレッチャーを医院の裏口に運んだ。そこには寝台タクシーがチャーターしてあって、ナースたちは手際よくストレッチャーの義母を寝台車に移し替えた。
意識のない義母を、住み慣れた家のいつもの座敷に上向きに寝かせた。夕方に小川院長と年配のナースがやってきて、鼻からチューブを挿入して固定した。そのチューブから、水やミキサーで砕いた食物を補給するようにと指示して、医師たちは引きあげていく。
積極的な治療をすべて止めた義母に、残された命は一日か二日、私は妻と義兄に必要な親族を集めるように……と伝える。

私は、義母の死をしっかりと確認しておこうと思った。私の両親は遠い昔にこの世を去り、妻の父も妻が二十歳のときに逝去している。私たち夫婦にとって、ただ一人だけ残されていた親の死はしっかり見届け、看取らなければ……という気持ちが強かった。そこで私は、昼間はもとより夜も眠らないで耳をそばだてていた。義母の寝息に、注意を集中していたのである。

翌日、親族が枕元に集まってきて、夜が更けると義母の寝室の隣に重なり合うようにして眠った。しかし、私は消灯した闇の中で眼を見開き、耳を澄ませる。義母の息遣いは荒々しく、強くなったり弱くなったり。そして、ときどき途切れた。

夜も更けた一時か一時半頃、義母の呼吸が聞こえなくなった。私は、三十、四十と頭の中でゆっくり数を数える。およそ一分が過ぎ、さらに二、三十秒が経過した。いよいよ「そのときがきた」と私は身構えた。が、次の瞬間、「プファーッ」という大きな寝息。ふたたび荒々しい呼吸が戻ってきた。それからしばらくして、義母は咳き込みを始める。何度目かの咳き込みで、「ポン」と痰が吐き出された。多分、「ポン」という音は聞こえなかったに違いない。しかし、私にははっきり聞こえたように思えたのである。その痰切れを境に、義母の息遣いが楽になっていく。得体の知れない何かと戦う「荒々しさ」が徐々に薄れていった。

翌日から、義母の病状は日増しに恢復して、意識も戻ってきた。そうなると介護が大変になる。鼻孔から挿し込んだチューブを引き抜いてしまうのである。すぐに小川医院に電話をかけると、ナースが駆けつけて太いゴム管を再び鼻孔から挿し込む。そして、「患者さんから目を離さないように」と言い残して帰って行く。その繰り返しが何度も続くと、車で駆けつけてくる医師やナースの態度も変わってきた。

昼間はともかく、夜の看護はむずかしい。私は妻と義兄に相談して、義母の布団と畳のあいだに板を挿し込んだ。そして、布団の両脇に飛び出た板の端に、義母の両手を括り付ける。もちろん、痛くないようにガーゼの紐で手首を緩く縛っての話である。そのようにして、夜間に鼻のチューブを引き抜かないように工夫した。

数日後に、義母は言葉も話せるまでに恢復し、少しずつ食事も摂れるようになっていく。そうなると、次の課題が生ま

れてくる。食事は出来ても歩けない、トイレにも行けない彼女を、誰が介護するのかという問題である。もちろん、狭い公団住宅でもう一度療養することに彼女が同意するわけはない。住み慣れた古い家で、最愛の息子と二人で暮らすことが義母の最大の望みである。あれこれと紆余曲折を経て、平日は小川医院に入院、休日は自宅に戻って親子で過ごすという結論に辿り着いた。

それ以来、金曜日の夕方に仕事を終えた義兄が小川医院に向かい、母親を引き取る。そこからタクシーで帰宅し、母を背負って住み慣れた家に入る。休日を母親と共に過ごした義兄は、週明けの月曜日に再びタクシーで小川医院に向かい、母を入院させて出社する……。その繰り返しが、二年余り続いた。

しかし、晩秋のある日曜の朝、義母は不帰の人となった。その前の晩は何時ものように食事をして、普段と変りなく眠りについたという。襖一つ隔てた座敷で眠っていた義兄が、翌朝、声を掛けても目を覚まさない。義母はまったく物音ひとつ立てず、声も出さずに、この世を去っていった。

☆

それは、私が五十一歳の秋のこと、東京の根津に住んでいた義兄が亡くなった。その義兄は十歳あまり歳が離れた姉の夫で、生粋の江戸っ子である。彼はブラシ職人、糊やペンキを塗る刷毛やブラシを作るのを生業としていた。彼が姉と結婚した頃は昔ながらの刷毛やブラシ—木製の柄に豚の毛などを挟み込んだもの—を作っていた。しかし、それらは単価が安いうえ、数多く売れるものではなかったので、彼は新しい分野に目を付けた。家電や車などに表示する商品名や社名などのプレートを磨く工業用のブラシである。その新たなビジネスは、高度成長時代の波に乗って目覚ましい勢いで伸びていった。

我国では一九五〇年代の後半に、『もはや戦後ではない』という言葉と共に、『三種の神器』が登場する。白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫の三つである。次いで、六〇年代の半ばになると高度成長時代に突入、今度はカラーテレビ、クーラー、カーの三つを持つことが国民的な夢になった。

経済成長が目覚ましかった時代には、家電や耐久消費財は

飛ぶように売れた。それらの製品には商品名や社名が付けられるが、そのネームプレートは企業にとって極めて重要なものとなる。いつ何時もピカピカに光り輝いている必要があった。

そこに目をつけた義兄は、ネームプレートを製造する会社に出入りして、さまざまなプレートに対応できる工業用のブラシを次々に創り出した。その新しい仕事は競争相手が少なく、使い勝手が評価されるとコンスタントに見返り注文が来る。しかも、納入価格はほぼ言い値でまかり通った。

時流に乗った事業は日増しに売り上げを伸ばし、結婚当初のアパート暮らしから一戸建を購入、さらには都心に五階建てのビルを建てるまでに発展した。

義兄のめざましい成功は、生業であった刷毛・ブラシ業を、時代のニーズに対応させたことにあることは間違いない。しかし、彼は世の中の動きを読む力に優れていた。さらに誰にも好かれる性格で、商才にも長けていた。子供のころは大の勉強嫌いで、小中学校はすべて劣等生で通したという。しかし、私は義兄に会う度に、「この人は本当に頭のいい人だ」という感慨をいつも抱いた。

義兄は上背が高くがっしりした体つきで、顔も見るからに強そうである。したがって、人から言いがかりをつけられるとか、ケンカを売られるというようなことは聞いたことがない。むしろ、不動産屋との折衝では相手を威圧して、問題のある物件でも思うが儘の条件で取引するような力があった。そのようにして、都内に一戸建てを購入したり、買い換えた土地にビルを建てたりしている。さらには、「私もビルやアパートが……」という兄弟のために、掘り出し物件を手に入れたりもしている。

しかし、一旦、話が商売になると、愛想が良くて人懐っこい表情や態度に変わる。己の無知無学をむしろ武器にして、相手の懐に抵抗なく飛び込んでいく。話す言葉はベランメーで、「ひ」がうまく発音できずに「し」になるが、本人は一向に気にしない。「宵越しの金は持たない」という典型的な江戸っ子気質で、夕方の五時に仕事を終えると、そこから先は遊びに徹する。自宅に大勢を集めて宴会を開く、あるいは盛り場に繰り出して飲み歩く。麻雀の卓を囲むときもある。とにかく賑やかなことが大好きで、金回りがいいことも手伝って、仕事の関係者や親類縁者が毎晩、彼の家に集まってき

た。

いつも明るく元気で、ときには豪快にさえ見える義兄ではあるが、実は大変な小心者で臆病であった。特に、狭いところに閉じ込められるのがとことん苦手で、電車や新幹線、ましてや飛行機には絶対に乗らない。一度も乗ったことがないのである。

さらに、面倒な書類や文書が嫌いで、運転免許の取得も学科試験が障壁になった。学科試験のテキストを一目見ただけで、「俺には無理だよー、受かる訳ねぇだろう」と諦めてしまう。そのため、彼は車の運転免許は持っていない。仕事も遊びも、常に運転手付きの自家用車かタクシーを使い廻す。いつでも乗り降りができ、好きなところに気が向くままに行ける車以外には決して乗ろうとはしなかった。

食に対する偏りも極端で、野菜、とりわけ生野菜は一切口にしない。焼肉屋でもステーキハウスでも、レタスや青菜類は目の前から退けてしまう。そして、「そんなものはウサギの餌だよ」と決めつけ、肉だけを頬張っている。姉によれば、自宅にいるときも朝からステーキを食べることが多いという。そして、「人間はよぉ、肉を食わなきゃ、力は出ねぇぞ」と豪語していた。

その飛ぶ鳥を落とす勢いで働いていた義兄が、還暦を迎えてすぐに腎がんに侵された。私はそのとき、転勤で四国の高松に住んでいた。姉からの電話で、義兄の病名を知ったが、最初に病院を受診させることが大変であったという。食欲不振や倦怠感が激しく、仕事も手に着かないので、嫌がる夫を説き伏せて近くの大学病院に連れて行った。外来を受診したが、その場ですぐに入院を言い渡され、診察や検査の結果は腎がん。

私は姉から「腎がん」と聞いたとき、「助からないな」と直感した。腎がん、正しくは『腎細胞がん』というが、それは自覚症状が乏しく、がんが発見されたときには末期であることが多い。

義兄の場合も腎がんが見つかった時はすでに末期で、死は時間の問題であった。しかし、臆病で小心、自分の思うようにならない世界が大嫌いな義兄に、がんを告知することは誰の眼にも無理があった。もし、告知をしたら義兄はどれほど取り乱してしまうか、そして何を仕出かすか、想像することもできない。

入院してしばらく経ったとき、手術でがんに侵された腎臓を摘出することになった。姑息的な手術だが、腎細胞がんの場合は全身に転移があっても治療成績がよくなるというデータに基づいたもの。しかし、その手術を、義兄が受け入れることは大変であった。医師とナースに家族も加わって、手術を受けなければ命が危ない、手術をすれば助かる……と何度も説得して、ようやく同意にこぎ着けた。

しかし、術後も病状は改善することはなく、徐々に進行していく。制癌剤の投与時や病状が悪いときには入院し、病状が比較的よくなると自宅で療養、という状況がしばらく続いた。時折、姉から経過についての電話が入ったが、義兄は私にひどく会いたがっている様子である。しかし、私は忙しいことを口実に、見舞いには行かなかった。

仕事で忙しいことは間違いなかったが、不治の病、助かる見込みがない義兄に、見え透いた嘘をつくことがたまらなく厭であった。義兄を病院に見舞い、二人だけになったとき、「なあ、俺の病気はいったい何なんだよォ」、さらに、「この注射は何の薬だ？」と訊かれたときには、どう答えたらよいものか……。

私は、がんをはじめ不治の病であっても、患者には真実を伝えるべきである、真実を知った上で、残された人生を精一杯に、大切に生きるべきだと思っている。したがって、病床で義兄に訊かれたときには真実を話して仕舞いはしないかと心配した。

――いや、多分私は嘘をつく、嘘をつくだろうが、その嘘はすぐに義兄にばれてしまう……。

そういう確信に近い思いが強かったのである。

結局、義兄は自宅とすぐ近くにあった大学病院を何度も行き来しながら衰弱していった。容体が悪化して大学病院に戻されるときは、ひどく嫌がり、家族をとことん困らせたという。そのような闘病生活が一年以上も続いた。しかし、義兄は死を迎えるその日まで、自分が腎がんであることを知ることはなかった。

初秋のある日、私は義兄の訃報を高松で受け取った。取り急ぎ喪服をスーツケースに詰め込み、妻と共に空港に向かった。羽田に着いてからおよそ一時間、根津にある細長いビルの階段を駆け上がる。一階から三階までは貸店舗や賃貸住宅、四階より上が義兄の住居である。その四階の玄関から居間を

通り、奥の座敷に入る。そこに義兄の白い棺が安置されていた。

私は、棺に横たわった義兄と対面して驚愕する。その死に顔は、不安と恐怖、苦痛と苦悩に満ちていた。得体の知れない何かに捕えられ、無理やり地の底に引きずり込まれる恐怖と苦しみに、大きく歪んだ唇から、「おーい、誰か助けてくれ！」という叫びが聞こえてくるようである。

その生涯忘れることのできない義兄の死に顔は、何度見直しても和らぐことはなく、火葬場の焼却炉の中に消えていった。

☆

数年前に、私とあまり歳が離れていない兄が肝臓がんで他界した。私には七人の兄と三人の姉がいたが、その中で一番兄弟らしい付き合いができた兄かも知れない。彼は、地元の工業高校を卒業後に上京。二番目の兄が経営するクリーニング店で働きながら夜間の大学に通った。大学を卒業した後は電線やケーブルを作る会社に就職したが、すぐに会社が倒産。それからは好きな車の整備士を目指して、荒川区にある小さな整備工場に勤めた。

その工場に隣接した佐藤家が、兄が生涯を過ごす棲家となった。佐藤家は、母と息子に娘の三人暮らし。父を第二次大戦で失った戦没者の遺族で、自動車の整備工場のほかに米屋を営んでいた。

兄は、車の修理や整備に朝早くから夜遅くまで真っ黒になって働いた。その真面目な人柄や働きぶりは、佐藤家の未亡人やその娘が認めるところとなり、兄は次第に工場の中心的な存在になっていく。

ところが、整備工場の社長、佐藤家の長男が大きな問題を抱えていた。彼は、重度のギャンブル依存症で、休日になると競馬競輪、競艇へと走った。そして、有り金を全部使い果たすと高利貸しに飛び込み、見境もなく借金を重ねる。整備工場には多くの客が出入りしていたので、収入は決して少なくはなかった。しかし、その収入を遥かに超える借金が日増しに膨らんでいく。

母子家庭で長男がギャンブル依存症となれば将来は暗くて心細い。未亡人と娘は、日が経つにつれて誠実で働き者の

兄に相談したり頼ったりすることが増えてきた。佐藤家の娘と兄は、ほぼ同じ年回りで、互いに好意を抱くようにもなっていた。しかし、このままでは整備工場は借金のカタに取られ、その次には米屋の店舗と住家までも失いかねない。

そこで、未亡人は兄たちに提案を持ちかける。兄が佐藤家の養子として娘と結婚、米屋を整備工場と切り離して、娘夫婦に相続させる。そうすれば工場は失っても、米屋だけは残るという算段である。

その提案を受け入れた兄は、佐藤家の婿に入り、米屋を継ぐことになった。それまで働いていた整備工場はほどなくして倒産し、工場の跡地も借金のカタに取り上げられてしまった。それでも長男のギャンブル依存症は治らず、佐藤家には借金の請求書が送られてくる。

兄は、見覚えもない請求書に驚き、未亡人、結婚後は義母となった女主人に問い質した。そうすると、「息子に、首を吊って死ぬしかないって泣きつかれたら仕方がないでしょ。私だって、判を押したくなんかないわよ」と、にべも無い返事。「そんな、馬鹿な！」と憤慨しても、口には出せない。養子の身としては、黙って引き下がるしかなかった。

その長男は、どこに住んでいるのかさえも定かではなかった。しかし、借金は増えることはあっても減ることはない。兄夫婦には三人の子供が生まれたが、兄は出口の見えない借金地獄に苦しみながら、家業の米屋や様々な副業で食いつないだ。

佐藤家の泥沼に嵌ったような生活は、未亡人が脳卒中で倒れるまで続いた。卒中後の未亡人は後遺症がひどく、寝たきり状態が長く続く。意識も「あるかないか」という状態だったので、兄夫妻は禁治産者の申立てをして、彼女が借金の保証人にはなれないように手を打った。

その兄と、生家で一緒に暮らした頃に印象的な思い出がある。恐らく兄が高校生で、私は小学校の三年か四年生ぐらい。兄は誕生日のお祝いに友だちを何人か家に招いた。我家に嫁いで数年経つ兄嫁が、渋々料理を作ってテーブルに並べる。その料理を囲んで、得意気に振る舞う兄が脳裏に焼き付いている。

私はそのとき、「兄の真似は到底できない、誕生祝いをして欲しいなどと口にすることさえ叶わない」と幼心に強く思

った。長兄が結婚したのは、私が小学校に入学する前の年。それまで一緒にいた兄や姉たちは高校を卒業すると東京に出て行く。長兄の夫婦には子供が一人、二人と生まれてくる。またたく間に住み慣れた我家は長男夫婦の家にとって変わり、自分の居場所がなくなっていく。

幼い子供は自分が愛されているか否かに極めて敏感である。口に出さなくても、大人の表情や身ぶりからそれを察知する。私の場合も、（そのときには理解できなかったが）兄嫁に嫌われていることを毎日針で刺されるように感じていたのだと思う。そのような家庭環境の中で、誕生日のお祝い会を盛大に開いて、楽しげに振る舞う兄の姿が羨ましく、眩しくさえ見えたのである。

私が成人してからも、兄との付き合いは変わりなく続いた。大学生の頃には養子に入った佐藤家によく遊びに行ったし、結婚後も何度か家族連れで家に泊めてもらった。また、兄から「腰が痛い」と相談されたときには、私の親しい医師を紹介、診察により愁訴は解消に向かう。痛みの原因は家業の米運びで、腰に負担が掛からない工夫が解決策になった。

兄の家は、寝たきりの義母の介護に十年余り煩わされたが、その義母も他界。三人の子供たちも自立して、しばらく離れていた兄の長男夫婦もすぐ近くに戻ってきた。私も四国から東京に転勤となり、千葉にあるマンションに移住。兄とは冠婚葬祭などがある度に顔を合わせ、ほかの兄弟と共に家族ぐるみの付き合いが続いていた。

そんなある日、兄から電話が掛かってきた。体調が悪いので、近くの開業医を受診したところ、アルコール中毒の診断。「晩酌に缶ビールを一本、それも三五〇ＭＬを一本飲む程度でアルコール中毒になるだろうか？」　というのが彼の質問である。私は、そんなことはあり得ない、診察した医師の誤診だよと一笑に付した。そして、少量の酒はむしろ健康に良いくらいで、まったく飲まない人より飲む人の方が長生きをする。むろん少量の酒だけどね……、という話をして電話を切った。

それから半年ほど経った夜に、また兄から電話が入った。かかりつけの医師は、その後もアルコール中毒だと断言するし、最近は下肢のこむら返りが頻発して、痙攣が起こると転げまわるほど痛いと言う。私は、「アルコール中毒は考えら

れないし、こむら返りは専門医に掛からなければ分からない……」と話して受話器を置いた。その数分後に、今度は兄からＦＡＸが入った。その日、彼が受診した開業医から手渡された臨床検査の報告書である。

その検査値を見て、私は驚いた。一〇種類余りの肝検査のすべてが異常値を示し、その程度も軽いものではない。私は即座に受話器を取って、兄に電話を入れる。「これはアルコール中毒ではなくて、もっと重い病気だよ。すぐに大きな病院を受診すること、明日にでも行くように」と。

数日の後、兄は都立病院を受診した。診察に当った医師は、紹介状を見て「ここはアル中患者を診るような病院ではないんだがねぇ……」と嫌味を言いながら渋々と診療を進める。しかし、二週間後の再診時にはＣ型肝炎と診断が下された。また、頻発するこむら返りは糖尿病が原因であることが判明。血糖値の管理が治療に結びつくとして、教育を兼ねた入院で治療することになった。

兄が何故、Ｃ型肝炎に罹患したのか、その原因は不明であった。手術や輸血を受けたことはないので、恐らく歯科医での治療時に感染したのではないかと兄は話している。この病気は厄介で、肝炎はやがて肝硬変に悪化して、その先は肝がん、正確には『肝細胞がん』に進行していく。

兄の場合も、やはり肝硬変から肝がんを発症する経過をたどった。都立病院を退院してから二、三年後に、兄は肝がんの治療で大学病院、根津に住んでいた義兄と同じ病院に入院する。そこで肝臓にできた腫瘍を、ラジオ波で焼切る治療――ラジオ波焼灼（しょうしゃく）療法――を受けることになった。

肝がんの発症と治療とを医師から告げられたときも、兄は私に電話を掛けてきた。その電話を聞いて、私はやはり「教科書どおりの経過か……」と、格別に驚きはしなかった。彼が受ける治療は、ラジオ波という高周波で腫瘍だけを選択的に焼き切る。具体的には、超音波で腫瘍の位置や大きさを確認しながら、細い針を肝臓に刺し込む。その針にラジオ波電流を流して、発生する熱で腫瘍を焼き切る。もちろん、痛みがないように鎮痛薬や局所麻酔をしてのことである。

その治療法について話した後で、私は、「検査入院とやることは同じだから、お見舞いにはいかないよ」と、こともなげに振る舞った。兄の不安が和らぐように、大した治療では

ないことを何度も強調して電話を切った。そして、一週間の入院治療後に掛かってきた電話でも、「多分、腫瘍はまたできると思うよ。でも、その都度焼き切ってしまえばいいから、まだ何年も元気に生きられる」と、兄を励ました。

そのような治療を繰り返しながら、兄は仕事に打ち込み、休日には家族揃っての行楽やドライブ旅行にも出掛けていた。しかし、C型肝炎の診断がついてから七、八年後に終焉がやってくる。

それは三月中旬の、まだ寒い日のことであった。そのときの兄の電話は、普段と違って沈んだ声である。訊くと、いまは大学病院に入院していて、そこから電話をしているという。入院の理由は、何時もと同じ肝臓にまたできた腫瘍の治療。しかし、四度目になる今回は、腫瘍ができた場所が悪い、門脈というところに腫瘍ができて、焼き切ることが難しい。しかし、処置しないと生きられないので、門脈の拡張術をやることになりそうだ……というのである。

私は、電話では埒が明かないと思い、その翌日、大学病院に兄を見舞った。そして、医師から言われたことを丁寧に聞き出して、彼の病状を把握した。

門脈というのは、腸で吸収された栄養を、肝臓に運び込む太い血管である。デンプンやタンパク質が胃や腸で消化されると、門脈経由で肝臓に入り、その人の体に合ったタンパクやグリコーゲンに作り変えられる。その太い門脈が腫瘍などで詰まった場合には、胃腸で消化された栄養は行き場を失う。脂肪だけは別経路で取り込まれるが、いくら食べても栄養が摂れない状態に陥ってしまう。

そこで若い主治医は、腫瘍で閉塞しそうな門脈を拡張する手術を行おうとしていた。しかし、それは危険を伴うので、入院した兄に施行できるか、検討をしているという。

門脈の拡張術を施行するか否かは、月末の診療カンファランスで決定するという。その話を聞いて、「拡張術ができれば元気が出てくるし、新しい治療法の可能性も見つかるよ」と兄を励まし、私は重苦しい病床を離れた。

それから十日ほど経った四月の上旬、再び私は大学病院に兄を見舞った。そしてカンファランスの結果は？　と訊いたが、兄は弱々しく首を横に振った。やはり、リスクが大き過ぎて門脈の拡張術はできない。となると、後は消極的な治療法、制癌剤の投与で延命を図るしか方法は残されていない。

私の浮かない表情を見て、病床の兄は「これから、どうなるのかな？」と低い声で尋ねた。

「ウーム、そろそろ覚悟をしておいた方が……」

私は声を潜め、そう答えることしかできなかった。

四月の下旬に、私は再び兄の病床を見舞った。わずかのあいだに兄は衰弱して、死期が迫っていることが感じ取れる。四十半ばになる長女が病床にぴったり寄り添って、父親の看病をしていた。

彼女の話から、私は、兄が肝がんの薬物治療を固く拒んでいることを知らされる。数日前に、点滴の後に気分が悪くなった彼は、制癌剤を投与されたことに腹を立てた。そして、長男をベッドに呼び寄せ、何故、制癌剤の投与を医師に許可したのかと詰(なじ)ったという。制癌剤に限らず、点滴や注射も嫌って、一時も早く家に帰りたい、頑張って食べるから病院から出してくれ……と訴える。

その強い希望を叶えてやりたいと、兄の一番下の娘が動いた。彼女は、介護の仕事に就いていて、在宅医療の進め方や、必要なベッドのレンタルなどに詳しかった。それらの準備がやっと整い、その日は大学病院を退院して、自宅に戻る日時が決まったところだという。

兄が眠っているあいだに、多くのことを聞かされた私は、幼い子供たちが家で待っているから……と腰を上げた長女をベッドサイドで見送る。その際に、彼女が枕元で呼びかけると、兄は目を覚ました。

病室には、私と兄の二人だけになった。私は、衰弱しきった彼をしばらく黙って見つめていた。その兄が、「俺、死ぬのかなぁ」と掠れた声でぽつりと呟く。私は、その兄の問いには答えなかった。そして、「家に帰ろう。家に帰って、ゆっくりしたらいい。ゆっくりと……」と何度も繰り返した。

大学病院の医師やナースは、終末期を迎えた兄の退院には強く反対したという。しかし、その反対を振り切って、兄の家族は退院を決行する。そして、在宅療養に切り替えた三日目に、兄は家族に見守られて息を引き取った。まだ幼い孫たちが、「ジイジ、ジイジ！」と枕元で呼び掛ける。それらの声に静かに微笑んで、兄は永久の眠りについた。

（了）

【編集後記】

■二〇一六年も残りわずかとなったが、文芸「草の丘」の第十一号を発行する運びとなった。今回は、短編二編に連載小説が二編、評論が一編に詩と短歌がそれぞれ一篇という構成である。

冒頭の『明暦の大火』は、四代将軍 家綱の時代に江戸の街を焼き尽くした大火の折に、小伝馬町の牢屋敷で起こったエピソードを描いた時代小説。連載二回目の『そよのバアバの空中サロン』は、和音という少女が高層マンションに住む祖母を訪ね、バアバの話に耳を傾けるというお話。やはり二回目の『ラン博士の館』は、頭の中は男子の性同一性障害の女子高生シン(立花 芯)が、自由奔放に青春を謳歌するライトノベル。巻末の『モミジのごとく』は、紅葉の鮮やかな煌めきと落葉に、人の死を重ね合せた私小説である。

『筒香と……』は、誰でも知っているプロの選手のあり方に触れたスポーツ評論。『冬の日の友』は、生きることの厳しさとやさしさとを詠んだ力強い詩。そして、『霜月から師走まで』は本誌に初めて掲載する短歌で、類型にとらわれない自由な表現が瑞々しい。

■今回は、長い作品がなかったので、活字の大きさをこれまでの9ポイントから標準の大きさ(10.5ポイント)に引き上げた。その結果、幾分 読みやすくなったように感じられる。

■本会では、新たな会員を募集している。小説に限らず、詩や随筆、評論、さらに短歌等を創作している方は是非、左記までご連絡を！

なお、本会の会則等については、本誌の八頁をご参照願いたい。

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

いんば 華子　bulldog_dolla_mon@hotmail.com

唐瀬 光　effect_fact_mouth_karase_4118@yahoo.co.jp

中川 とら　nakagawatora1@gmail.com

畑中 康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

香取 淳　katorijun27@gmail.com

高橋より（イラスト）

junko328p@softbank.ne.jp

草の丘 第十一号

発行　二〇一六年一二月二五日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取 淳

連絡先メール　katorijun27@gmail.com

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp